

41460

教科書文庫

4

810

71-1938

200030
169Z

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

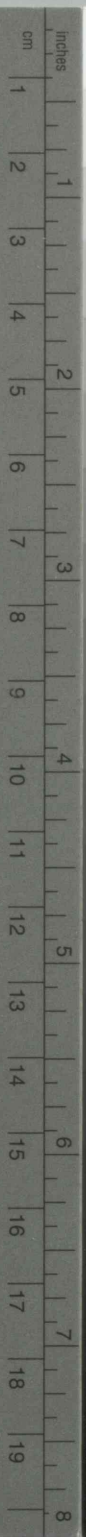


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
T010
資料室

新制國語讀本

卷一

新教授要目準據



日一月二年三十和昭
濟定檢省部文
用科語國校學業實科文漢語國校學中

學習院教授 東條操編

新制國語讀本 卷一

新教授要目準據

東京 三省堂
大阪

資料室

375.9
T010

Handwritten notes and stamps on the right page:

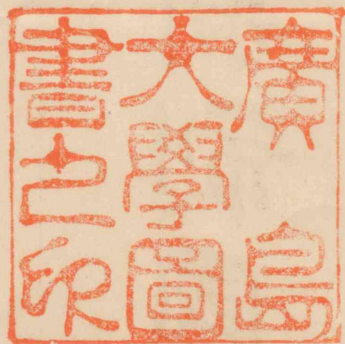
- 1.60.
- 6.10
- 2.60
- 6.60
- 2.640
- 6.503
- 2.740
- 3.00
- 3.00
- 3.00
- 3.00
- 2.10
- 2.40
- 2.10

Vertical text on the right edge: 中 大 文 修 理 教



(照參課七十第)

(筆平義山穴) 山 士 富



卷一 目次

- 一 伸びゆくもの
- 二 日出づる國
- 三 朝あさ
- 四 さくらの花
- 五 旅の繪だより
 - 一 嚴島より
 - 二 菅公配所の榎寺より
- 六 峠の茶屋

目次

夏目漱石	五十嵐力	芳賀矢一	山村暮鳥	松井簡治	(編者)
一八	一五	一〇	八	四	一

七 狗ころ

八 初夏の奈良

九 菖蒲の節句

一〇 木のぼり

一一 ニュートンと蠅

一二 學藝に志すもの

一三 文字の發達

一四 東郷大將

一五 皇天の加護

一六 海と山

二葉亭四迷 二六

萩原井泉水 四〇

島崎藤村 四八

前田夕暮 五四

山本有三 五九

三浦梅園 六三

(編者) 六六

(忠烈美譚) 七二

小笠原長生 七八

八五

一海

二山

一七 富士登山

一八 夏休

一九 涼み臺

二〇 蜀山人の盆燈籠

二一 蜘蛛の絲

二二 寓言

一堪忍

二猫の名

二三 溫故知新

千家元麿 八五

川路柳虹 八六

萩原井泉水 八八

幸田露伴 一〇七

吉村冬彦 一一一

饗庭篁村 一二〇

芥川龍之介 一二七

一三九

柳澤淇園 一三九

平維章 一四一

一四三

二四	秋	來	る
二五	秋	の	蟲
二六	心	の	洗濯
二七	將	軍	乃木
二八	日	本	の軍隊

德	富	蘆	花	一四五
大	町	文	衛	一四八
柴	田	鳩	翁	一五七
櫻	井	忠	溫	一六四
平	田	晉	策	一七八

—目次終—



新制國語讀本 卷一

一 伸びゆくもの

陽炎 擡げ
躑躅 弛緩

うららかな春が訪れて来た。遠山の雪はまだ消えな
 いが、垣根のほとりには陽炎かげろふがゆらくのぼつて、草の若
 芽も頭を擡げ、麗しい日の光の方へと伸びてゐる。明
 り空の彼方には雲雀がはち切れるやうな、精いつばいの
 力で鳴いてゐる。魂全體の叫びだと詩人はうたつてゐ
 るが、まことに少しの躑躅も弛緩もない歡喜の叫びでは

伸びゆくもの

ないか。希望に満ちた快活な叫びではないか。



姿一菱

あり、何時迄も伸びてゆく力を失はない人である。この

春に溢れた響は尊い。そこには創造の力がこもつてゐる。この春の姿こそは實に我等の心なのだ。

世に偉人と仰がれ、傑士と尊ばれる人は何時迄も若い人で

さうして

若さと伸びゆく力こそは、國の寶である、世の寶である。すべての幸福と光榮とがこの中から生れ出る。私たちは少年である。今、中學生として高き理想の第一歩を踏み出し、洋々たる前途を迎へた私たちの全身には、新しい力が漲つてゐる。さうして、萬世一系の天皇を上^にに戴き、無窮に榮えゆくこの貴い國に生を享けた光榮に胸はとびろき、希望に眼は輝いてゐる。春よとこしへに若くあれ。

とこしへ

松井簡治
文學博士。國文
學者。千葉縣の
人。文久三年
(一五三) 生。

二 日出づる國

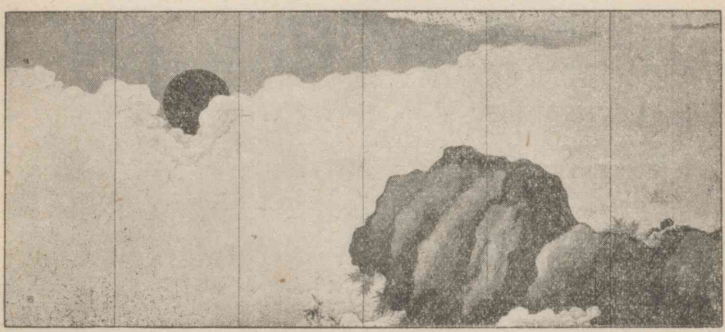
松井簡治

文化

我が國は遠い昔から日出づる國と呼ばれてゐる。日出づる國！ 嗚呼、なんと美しい名ではないか。東の空が明け初めると、紫にまた紅に曙の雲がたなびき、靜な波に洗はれてきら〜と朝日が昇る。其の嚴かな、然も目覺しい姿が、我が國の名に呼ばれてゐるのである。嗚呼、日出づる國！ なんと勇ましい名ではないか。日の出は、夜の暗黒を破る點から文明の魁を示し、燦爛として輝く光景から文化の全盛を思はせ、朝の第一の光であるといふ事實から前途の希望を語つてゐる。日出

先づ。

大正天皇
御名は嘉仁。大
正十五年崩御、
寶算四十八。
年々に云々
大正五年の御
製。



筆 雲 翠 室 小

づる國の國民は、世界國民の先頭に立つて、自ら先づ立派な國民となり、快活な心を以て自國の全盛を喜ぶと共に、益、其の發展に力を盡し、また常に前途に希望を抱いて、元氣よく勉強を續けねばならぬ。

大正天皇が、

年々に我が日の本の

榮行くも

いそしむ民の

あればなりけり

山光

平野國臣
通稱は次郎。福岡藩士、幕末の志士。元治元年(二五四)歿、年四十三。

と仰せられた御製、志士平野國臣が、

青雲のむかぶす極みすめろぎの

御稜威輝く御世になしてん

と詠んだ歌、いづれも日出づる國の國民にとつて、最も大切な教訓である。

神武天皇以來二千五百九十餘年、連綿たる一系の皇室を戴いて、順序正しい進歩を續けて來た我が國は、世界現存の何れの國家に比べても最も古い歴史を有つてゐる。歴史は古い。併しながら、日出づる國の國民は常に若々しい心を有つてゐる。大化の改新も、明治の維新も、皆此の若々しい心から生れたのである。

戴載

大化
孝徳天皇の御代の年號(三〇五年一三二九)。

壤壞懷

窮射
殊特

鍊練

日出づる國の國民は、常に此の若々しい心を以て、天壤と共に窮りのない國運の發展を期すべきである。殊に諸子の如き前途有爲の少國民が、此の心掛を以て、十分に身體を鍊り、道徳を磨き、知識を廣めて行つたならば、我が國家の前途は實に頼もしいものである。嗚呼、日出づる國！此の美しい勇ましい名は廣い世界にたゞ一つ。それは我が國にだけ附けられた名である。

躬リ自カら

三朝

山村暮鳥

山村暮鳥
本名は土田八九
十。詩人。群馬
縣の人。大正十
三年歿。年四十
一。

雨戸をがらり引きあけると、
どつちまへへ躍りこんだのは日光だ。
お、まぶしい。
頭をがんと一つなぐりつけられでもしたやうに
それでわたしの目はくらみ、
わたしはそこに直立した。
お、
けれどもわたしのさつぱりした朝の目ざめを、
どんなに外で待つてゐたのか、

この激烈な日光は。

やがておづく、と痛い目を細く漸く見開いて、
わたしは見た、
わたしは見た、
そこに
すばらしい大きな日を、
からりと晴れた、
すべてが力に充ち満ちた
新しい一日のはじめを。

氷結

氷水

(暮鳥詩集)

氷水

四 さくらの花

芳賀 矢一

芳賀矢一
文學博士、元國
學院大學學長。
國文學者。福井
市の人。昭和二
年歿、年六十一。

あらう。
漫 | 慢 | 鰻



一矢賀芳

わが日本の國花として、世界に誇るに足るものは櫻であらう。爛漫と咲き亂れた櫻花の、山を埋め谷に満ち、雲とまがひ雪とまがふ景色は、日本特有の美景である。櫻の花の色は極めてあつさりとして居る。併し、純白ではない。いはゆる櫻色である。その瓣は極めて薄い。一樹に無数の花を着けて、咲く時は一時に爛漫と残りなく咲く。上品な大宮人の風もあつて、楚楚たる野情も添はつて居

瓣 | 辨 | 辯
薄 | 簿

あをし(青)

草 | 宜

空に知られぬ雪
「櫻ちる木の下風
は寒からで空に
知られぬ雪ぞ降
りける。」
(紀貫之、拾遺
集)
しまふ

る。空あをく水清い日本の景色には最もよく釣り合つて、深山都市どこにあつても皆宜しい。廿日草の長い盛りも無く、薔薇花の高い香氣も無いが、空に知られぬ雪と降り散つては一段の風趣再び世界を花の中に包んでしまふのである。日本の花の中の花は櫻である。櫻の咲くのは春の末である。春の日本は水蒸氣が多い。晝はどんよりと曇つて、寒くもなく、暑くもない日和を花曇



山 野 吉

照りもせず云々
「照りもせず曇り
もはてぬ春の夜
の朧月夜にしく
ものぞなき。」
(大江千里、新
古今集)
朧 朧 瀧
霞 霧
ふさはし
微 微

賀茂真淵
號は縣居。國學
者。遠江國(靜
岡縣)の人。明
和六年(三三
元)歿、年七十三。

「久方の」の歌
紀友則の歌。
(古今集)

といふ。夜は照りもせず曇りもはてぬ朧月夜、雲霞とま
がふ花には、最もふさはしい景色である。春の特色はど
こまでも駘蕩といふ點にあり、溫和な所にあり、峻嚴猛烈
といふ心の微塵もない所にある。櫻はこの時候にはぐ
くまれて咲き出る花である。きは立つた特色の無い所
が即ちその特色である。

賀茂真淵は

うらく／＼とのどけき春の心より

匂ひ出でたる山櫻花

といつた。春の日は永い。

久方の光のどけき春の日に

しづ心なく花の散るらむ

櫻は永陽の日に最もふさはしい花である。こゝに大

宮人の悠揚迫らぬ様子が想ひやられる。

百敷の大宮人はいとまあれや

櫻かざして今日も暮しつ

牛車ぎゅうしゃの歩みおそく、花見てかへる黄昏の景、さながらの繪

卷物である。

吉野山霞の奥は知らねども

見ゆる限りは櫻なりけり

これは満山花に包まれた吉野山の景色を詠んだので
ある。

「百敷の」の歌
山邊赤人の歌。
(萬葉集)

吉野山の歌
八田知紀の作

花の雲の句
松尾芭蕉の作。

鐘一つ云々
「鐘一つ賣れぬ日
はなし江戸の
春。」
(榎本其角)

花の雲鐘は上野か浅草か

これは鐘一つ賣れぬ日もなき大都會の花に掩はれた
光景である。櫻は牡丹や、薔薇のやうに花瓣を賞翫する
花では無くして、樹として賞翫する花である。否多くの
樹を集めて、人は唯花中にあつて賞翫する花である。上
からのぞいて愛でる花では無くして、下から眺めて愛で
る花である。春風四月、日本人はしばし花の世界の人と
なるのである。

(月雪花に據る)

五十嵐力

文學博士。早稲
田大學教授。國
文學者。米澤市
の人。明治七年
生。

五 旅の繪だより

一 巖島より

人工と自然との美しく調和

したる事巖島の如きはなし。

低き廣き朱の御社は、海中より

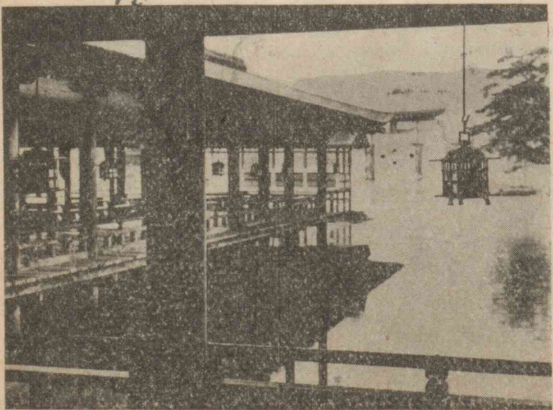
自然に浮きあがりたるが如く、

彌山と大鳥居との前後に立て

るは、山靈驚きめでて之を護り、

人衆悦び敬ひて歸依の眞心を

表せるが如し。この前を五丈



巖島

五十嵐力

歸依

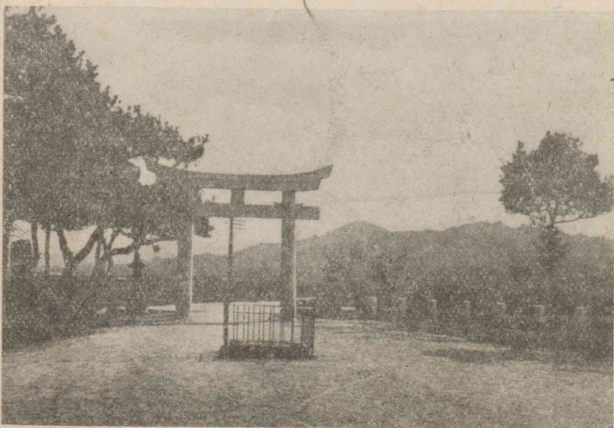
宮居川神殿

四尺の大鳥居に守らせ、後ろを二千尺の大彌山に守らせて、低き宮居の平たく落ちつきたる様の見事さは、これを何とかいはん。稱へても稱へ過ぐべからざるは、嚴島にて候。

二菅公配所の

榎寺より

太宰府の天満宮を拜し、都府樓の跡を見て、それから武藏温泉へ行く途中、此の菅公配所の寂しい榎寺を訪れました。後ろに天拜山を負ひ、前は青



寺 榎

武藏温泉
福岡縣筑紫郡二日市の西南に在る。

太宰府

推古天皇 大化五年

大軍師 日向臣

西口守

五州島

三撃

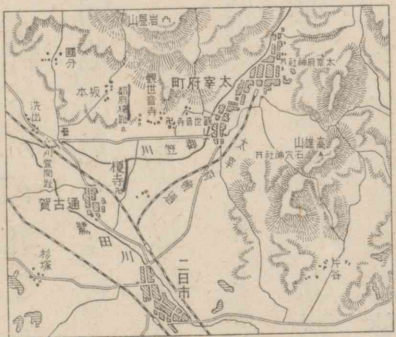
延喜

醍醐天皇の御宇の年號(一五二—一五三)

延一延

斷腸うらうい

かか



田を通して、左手に都府樓を望み、少し右手に觀音寺を望むといふ所で、まはりは悉く青い田畑に圍まれた、ほんとに寂しい一廓であります。都府樓纔に瓦色を看る。觀音寺只鐘聲を聽く。その瓦の色を此處から見、その鐘の聲をこゝから聞かれたのかと思ふと、延喜の昔をまのあたりに見聞く心地して、疎林の梢に残る夕陽、田の面をわたる夕風、悉く斷腸の種ならぬはありません。

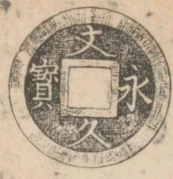
(遠 近)

夏目漱石
名は金之助。英
文學者、小説家。
東京市の人。大
正五年歿、年五
十。

六峠の茶屋

夏目漱石

屈託氣



文久錢

「おい。」と聲を掛けたが返事がない。
軒下から奥をのぞくと、煤けた障子が立てきつてある。
向側は見えない。

五六足の草鞋が寂しさうに底からつるされて、**屈託氣**
にふらり／＼と揺れる。下に駄菓子カの箱が三つばかり
並んで、そばに五厘錢と文久錢とが散らばつてゐる。

「おい。」とまた聲をかける。土間の隅に片寄せてある
臼の上にふくれてゐた鶏が、驚いて眼を覺す。「くゝゝ、く
くゝ。」と騒ぎだす。敷居のそとに土べつゝひが、今しが

ずつと

閑靜

たの雨にぬれて、半分ほど色が變つてゐる上に、眞黒な茶
釜にかけてあるが、土の茶釜か銀の茶釜かわからない。
幸ひ下は焚きつけてある。

返事がないから無斷でずつとはいつて、床几の上に腰
をおろした。鶏は羽ばたきをして、臼から飛びおりる。
今度は疊の上にあがつた。障子が締めてなければ、奥ま
で駆けぬける氣かも知れない。雄が太い聲で、「こけつこ
つこ。」といふと、雌が細い聲で、「けゝつこつこ。」といふ。
まるで人を狐か狗のやうに考へてゐるらしい。

床几の上には一升枡カほどの煙草盆が閑靜に控へて、中
にはとぐるを卷いた線香が、日の移るのを知らぬ顔で、頗

悠長に

婆姿

暢氣

悠長にいぶつてゐる。雨は次第に収る。暫くすると、奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりとあく。中から一人の婆さんが出た。どうせ誰か出るだらうとは思つてゐた。へつゝひに火は燃えてゐる。菓子箱の上に錢が散らばつてゐる。線香は暢氣にいぶつてゐる。どうせ出るには極つてゐる。しかし、自分の店を明放しても苦にならないと見える。ところが、都とは少し違つてゐる。返事がないのに床几に腰をかけていつまでも待つてゐるのも、少し二十世紀とは受取れない。こゝらがまことにおもしろい。その上出て來た婆さんの顔が氣に入つた。

寶生

お能の五流の

高砂

謡曲。播州(兵庫縣)高砂の松の下で爺と婆とが肥後國(熊本縣)の阿蘇の神主友成と物語る一曲。

橋懸

能の樂屋から舞臺へ通ふ路。



二三年前、寶生の舞臺で高砂を見たことがある。その

時これは美しい活人畫だと思つた。はうきを擔いだ婆さんが橋懸を五六歩來て、そろりと後向きになつて、爺さんと向ひ合ふ。その向ひ合つた姿勢が今でも眼につく。余の席からは婆さんの顔が殆ど眞向きに見えたから、あゝ美しいと思つた時に、その表情はびしやりと心のカメラに焼きついてしまつた。茶店の婆さんの顔

は、この寫眞に血を通はしたほど似てゐる。

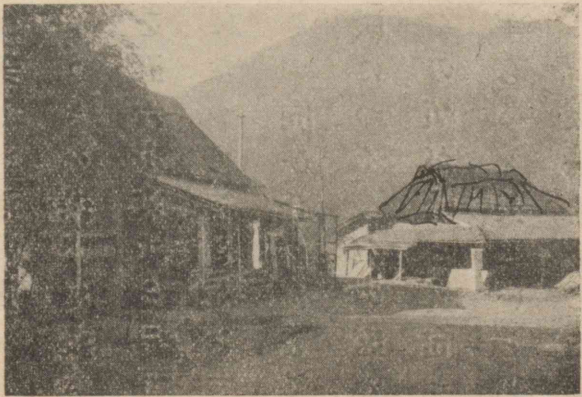
「お婆さん、こゝをちよつと

借りたよ。」

「はい、これは一向存じませ
んで。」

「大分降つたね。」

「生憎なお天氣で、さぞお困
りでござんしよ。おゝ、おゝ、
大分おぬれなかつた。今火
を焚いて乾かして上げまし
よ。」



峠の茶屋

「そこをも少しもしつけてくれれば、あたりながら乾
かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、たゞ今焚いて上げます。まあお茶を一つ。」
と立上りながら、しつ／＼と鶏を追ひさげる。「こゝゝゝ。」
と駆けだした夫婦は、焦茶色の疊から駄菓子箱の中を踏
みつけて、往來へ飛び出す。

「まあ一つ。」と婆さんはいつの間にか、くりぬき盆の上
に茶碗をのせて出す。茶の色の黒く焦げてゐる底に、一
筆がきの梅の花が三輪、無造作に焼きつけられてゐる。

「お菓子を。」と今度は鶏の踏みつけた胡麻ねちと微塵
棒とを持つてくる。

微塵棒
菓子の名。微塵
粉に砂糖を加
へ、かためて細
長くしたもの。

婆さんは袖無の上から襷をかけて、へつゝひの前に蹲る。余は懐から寫生帳を取出して、婆さんの横顔を寫しながら、話をしかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「えゝ、毎日のやうに鳴きます。こゝらでは夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないとなほ聞きたい。」

「^カ生憎けふは、——先刻の雨でどこぞへ逃げました。」
をりから、へつゝひのうちがばちくと鳴つて、赤い火

生憎

がさつと風を起して、一尺餘り吹き出す。

「さあおあたり。さぞお寒かる。」といふ。軒端を見ると、青い煙が突き當つて崩れながらに、微な痕をまだ板庇にからんでゐる。

「あゝ、いゝ心持だ。御蔭で生き返つた。」

「いゝ工合に雨も晴れました。そら天狗岩が見えだしました。」

^カ逡巡として曇りがちな春の空をもどかしとばかりに

^カ吹き拂ふ山嵐の、思ひきりよく通り抜けた前山の一角は、未練もなく晴れつくして、老嫗の指さす方に、あら削りの柱の如く聳えるのが天狗岩ださうだ。

(草枕)

逡巡

未練

二葉亭四迷
本名は長谷川辰
之助。小説家。愛
知縣の人。明治
四十二年歿。年
四十六。

七 狗 ころ

二葉亭四迷

一

忘れもせぬ、祖母の亡くなつた翌々年の、春雨のしとし
とと降る薄ら寒い或夜の事であつた。

宵惑ひの私は、例のとほり宵の口から寢てしまつて、い
つ兩親は寢に就いた事やら、一向知らなかつたが、ふと目
を覺すと、有明ありあけが枕元をぼんやりと照して、四邊はほの暗
く、しんとしてゐる中で、耳元近くに妙な音がする。疑ひ
もなく、小狗の啼聲だ。時々咽喉でも締められるやうに、
けたゝましくきやんゝと啼き立てる。其の聲尻こしが、や

有明

堪 堪

がてか細く悲しげになつて、めいるやうに遠いゝ處へ
消えて行く。と思へば、忽ち又近くで堪へきれないやう
に啼き出して、くんゝと鼻を鳴らすやうな時もあり、ぎ

やおと欠あぐりをするやうな時も
ある。



二葉亭四迷

私は元來動物好きで、就中なかんづく
狗は大好きだから、近處の狗
は大抵馴染なれだ。けれども、こ

んなか細いいたいけな聲で啼くのは、一匹も無い筈だか
ら、不思議に思つてそつと夜着の中から首を出すと、
「どうしたの。寢られないのかえ。」と、母は寢返りを打

つてこちらを向いた。私は此の返答をさし措いて、
「あれは白ぢやないねえ、お母さん。もつと小さい狗の
聲だねえ。どうしたんだらう。」

「棄狗さ。」

「棄狗つてなあに。」

「棄狗つて。——誰かが棄てて行つたのさ。」

私は暫く考へて、

「誰が棄てて行つたんだらう。」

「大方何處かの、——何處かの人さ。」

「何處かの人^が狗を棄てて行つた。」と、私は二三度繰返
して見たが、分らない。

「どうして棄てて行つたんだらう。」
「うるさいよ。」などといふ母ではない。何處までも相
手になつて、其の意味を説明してくれて、
「もう晚いから黙つてお寢。」と、優しく言つて、又彼方を
向いてしまつた。

私もまた夜着を被つた。狗は門前を去つたのか、啼聲
がやゝ遠くなるにつれて、父の躰が又うるさく耳に附く。
寢られぬまゝに、私は夜着の中で、今聞いた母の説明を繰
返し繰返し味はつて見た。まづ何處かの飼狗が縁の下
で兒を生んだとする。小ぼけなむくくしたのが重な
り合つて、首を擡げて、みいくと乳房ちぶさを探してゐるとこ

あわて

生え

ろへ、親狗が餘處から歸つて来て、其の側へどさりと横になり、片端から抱へ込んで、べろ／＼舐めると、小さいから舌の先で、たわいもなく、ころ／＼と轉がされる。轉がされては大騒ぎして起き返り、又よち／＼と這ひよつて、ぼつちりと黒い鼻面でお腹なかを探り廻り漸く思ふ柔らかな乳首を探り當て、あわててちうと吸ひ附いて、小さな両手で揉み立て揉み立て吸ひだすと、甘い温かな乳汁がどくどくと出て来て、咽喉へ流れ込み、胸を下つて何とも言へずおいしい。すると、腋の下からまだ乳首に有りつかない兄弟が、鼻面で割り込んで来る。取られまいとして、産毛の生えた腕を突つ張り、大騒ぎをやつてみるが、到頭取

融けさう

られてしまひ、又そこらを尋ねて他の乳首に吸ひ附く。其の中にお腹もくちくなり、親の肌で身體も温まつて、融けさうな好い心持になり、ついうと／＼となる、く／＼んだ乳首が脱けさうになる。夢心地にもあわてて又吸ひ附いて、一しきり吸ひ立てるが、直ぐに又たわいなくうとうとなつて、乳首が遂に口を脱ける。脱けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなり、一向正體がない。其の時、忽ち暗闇からもちやく／＼と毛の生えた、節くれ立た大きな腕がぬつと出て、正體なく寢入つて居るところを、むずと引つ攪み、宙に吊す。驚いて目をぼつちり開け、いたいけな聲で悲鳴をあげながら、四足を張つて藻掻く

出よう。

さまようて

中に、頭から何かで包まれたやうで、眞暗になる。窮屈で息が詰りさうだから、出ようとするが、出られない。暫く藻搔モカいてゐる中に、ふと足搔モカきが自由になる。と、領元えりもとを撮まれて、高いく處からどさりと落された。うろくとしてそこらを見廻すけれど、何だか變な淋しい眞暗な處で、誰もゐない。茫然マカとしてゐると、雨に打たれて見る間に濡れしよぼたれ、恐しく寒くなる。身慄ひ一つして、くんくんと親を呼んで見るが、何處からも出て來ない。途方に暮れて、よちく這ひ出し、雨の夜中をたゞひとり、温かな親の乳房を慕つて悲しげに啼き廻る聲が、先刻一度門前へ來て、又何處へかさまようて行つたやうだつた。

來たやうだ

が、それが何時か又戻つて來て、何處をどう潛り込んだのか、今は啼聲が正しく玄關先に聞える。

二

「お母さんお母さん、門の中へ這入つて來たやうだよ。」
と、私は何だか居たたまらないやうな氣になつて、又母に言ひかけると、母は氣の無ささうな聲で、

「さうだね。」

「出て見ようか。」

「出て見ないでも好いよ。寒いぢやないかね。」

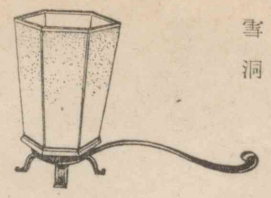
「だつてえ——あら、あんなに啼いてゐる——」。

と、折から絶え入るやうに啼き叫ぶ狗の聲に、私は我知らずむつくり起きあがつたが、何だか一人ではこはいやうな氣がして、

「よう、お母さん、行つて見よう、よう！」

「ほんたうに仕様がない兒だねえ。」と、口小言を言ひ言ひ、母も澁々起きて、雪洞ほんぼりを點けて立ちあがつたから、私も其の後ろについて、玄關と言つてもつい次の間だが、玄關へ出た。

母が履脱へおりて格子戸の掛金を外し、がらりと雨戸を繰ると、颯と夜風が吹きこんで、雪洞の火がちらちらと靡く。其の時小さな鞠のやうなものが、つと軒下を跳び



格格

退いたやうだつたが、やがて雪洞の火先が立直つて、一道の光が颯と戸外にさし、雨水の處々に溜つた地面を、一筋細長く照し出した處を見ると、つい其處に、生後まだ一箇月も經たぬ、むくくと太つた、赤ちやけた狗ころが、小指ほどの尻尾をちぎれさうに**掉**り立てて、此方を見上げてゐる。なりは私が寝てゐて想像したよりも大きかつたが、果して全身雨に濡れしよぼたれて、泥だらけになり、だらりと垂れた割合に大きい耳から雫を滴し、ぼつちりと兩の眼を青貝のやうに並べて光らせてゐる。
「おやく、まあ、可愛らしい。」と、母もつい言つてしまつた。況や私は狗好きだ。じつとして見てはゐられない。

推堆



狗

母の袖の下から首を出して、ちよつくと呼んで見た。
 さほど怖れた様子もなく、ちよくと側へ来て、流石さすがに少し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる私の手を、下からぐいぐい推上げるやうにして、べろべろと舐め廻し、手をくれるつもりなのか、頻りに圓

い前足を舉げて、ぼたくやつてゐたが、果てはやんはり
 と痛まないほどに小指を咬む。

私は、可愛くて可愛くてたまらない。母の顔を見上げ
 ながら、少し鼻聲を出し掛けて、

「お母さん、何か遣つて。」

「遣るのも好いけれど、居附いてしまふと仕方がないね
 え。」と、口では拒むやうな事を言ひながら、それでも臺所
 へ行つて、缺茶碗に冷飯を盛つて、何かの汁を掛けて来て
 くれた。

早速履脱へ引入れてこれをあてがふと、仔狗は一寸香
 を嗅いで、すぐ旨さうに、まづびちやくと舐めだしたが、

碗椀腕

あてがふ

汁が鼻の孔へはいると見えて、時々くしんくしんと小さな
 嚏くしゃみをする。忽ち汁を舐め盡して、今度は飯に掛つた。他
 に争ふ兄弟も無いのに、頻りに小言を言ひながら、がつが
 つと食べ出したが、飯はまだ食ひ慣れぬかして、兎角上顎
 に引つ附く。首を掉つて見るが、そんな事では中々取れ
 ない。果ては前足で口の端を引つ搔くやうな真似をし
 て、大藻搔きに藻搔く。

此の隙に、私は母と談判を始め、

「今晚一晩泊めて遣つて。」と、雪洞を持つた手にぶらさ
 がる。母は一寸澁つたが、もうかうなつては仕方がない。
 「お父さんに叱られるけれども。」と言ひながら、つまり

棧俵法師を搜して来て、履脱の隅に敷いて遣つたは好か
 ったが、其の晩一晩啼き通されて、私はちつとも知らなん
 だが、お蔭で母は父に小言を言はれたさうな。

狗嫌ひの父は泊めた其の夜を啼き明かされると、うん
 ざりしてしまつて、翌日は是非逐ひ出すと言ひ出したか
 ら、私は仔狗を抱いて逃げ廻つて、如何しても放さなかつ
 た。父は困つた顔をしてゐたが、併しそれも一時のこと
 で、其のうちに仔狗も獨り寝に慣れて、夜も啼かなくなる
 と、逐ひ出す筈のものに、何時しかボチと言ふ名まで附い
 て、姿が見えぬと、父までが一緒に搜すやうになつてしま
 った。

(平 凡)

荻原井泉水
名は藤吉。俳人。
東京市の人。明
治十七年生。

稍 梢

八 初夏の奈良

荻原井泉水



奈良はいつ來ても好いが殊に新緑の頃が好い。櫻の
頃に來た時には、まだ黄いろく枯れた
まゝであつた芝は、生き／＼と青んで、
鹿がその上に寝ころんだり、又その青
い芽をたべたりしてゐた。
猿澤の池の柳は萌黄色をしたその
若々しい美しさが、稍老いて、こんもり
と葉を茂らしつゝ、水に映つてゐた。
春によく來る團體の客のざわめきも



朝の奈良

今はなくて、池の縁にあるベンチには木蔭を求めて子供を遊ばせてゐる女があるばかりだった。

荒池のほりはなほ静かだった。奈良ホテルに沿うて葉櫻のほの暗いほどの小徑を歩くのも好かった。池には遠くの興福寺の塔の影が映つてゐた。その水に石を投げて水の輪が出来るのに興じる子供たちもゐた。一つの輪が廣がつて、それが消えてゆくのを待つては、他の子供が石を投げるのであつた。

梅の木が林をなしてゐる處では園丁がその枝をおろしてゐた。芝の上に落ちた青葉には、鹿が寄つて來て香を嗅いでゐた。

嫩草山・高圓山わかき たかまどがそれ



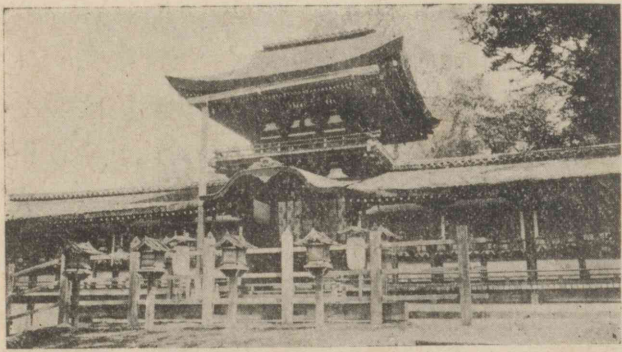
にこんもりとして輝いてゐた。高畑のからりとした芝生の上には大きな花が咲いたやうに美しい洋傘が動いてゐた。あせびの花は大抵すがれてゐたが、その花の多い谷のやうになつた路には、美しい影が出来る。こまかく洩れてひそんでゐる光の戯れも面白かつた。

春日の社に近い杉の木立は夏らしく黒み渡つてその葉の光から、愛らしい淺緑の爪

あせびの花



斑一斑



春日神社

のやうな若葉が出てゐた。参詣の人の多く通る道には、鹿が澤山まちうけてゐた。私は煎餅を手に持つてゐるだけ皆與へてしまつたが、彼等は圓々とした可愛い眼を私に向けて、いつまでもせびるやうに蹤いて來た。一つの鹿は私の前で首を上げたり下げたりした。それは御辭儀なのだつた。私はおとなしく私の前に脚を折つてゐる鹿の背を、犬にでもするやうに撫でてやつた。文字通り鹿子斑かのこまだらの

その肌はつやくしかつた。五月は毛並の光澤の一番美しい時だといふことである。ぬけ換つてまだ間もない角は、やつとY字形になつたばかりで赤みを帯びて、柔らかさうだつた。手に握つてみると、その赤い色の血のぬくみが感じられた。

南大門の通には燕が澤山飛んでゐた。そこらに佇んでゐる鹿の細く高い脚の間を、すり抜けるかと思ふやうに飛んだり、角細工などの土産物を並べてゐる店の軒に、ついと飛び入つたりしてゐた。

大佛殿を左へ松林の間を行く路の感じも好かつた。草が長く伸びるまゝになつてゐる向うに、實に古い堂が

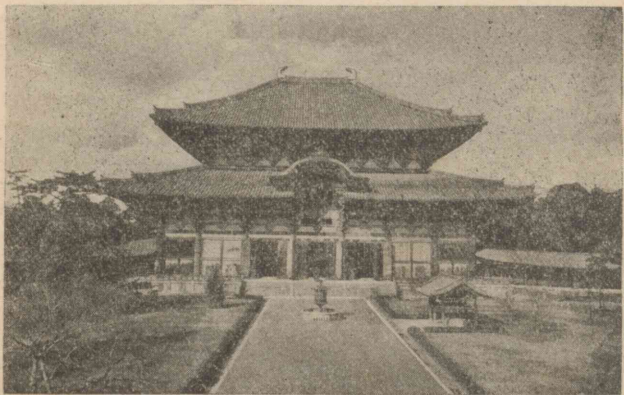
南大門
東大寺の總門。
東大寺は華嚴宗
の本山。

壇 壇 壇

見える。それは戒壇院らしかつた。顧みると、大佛殿の

じい

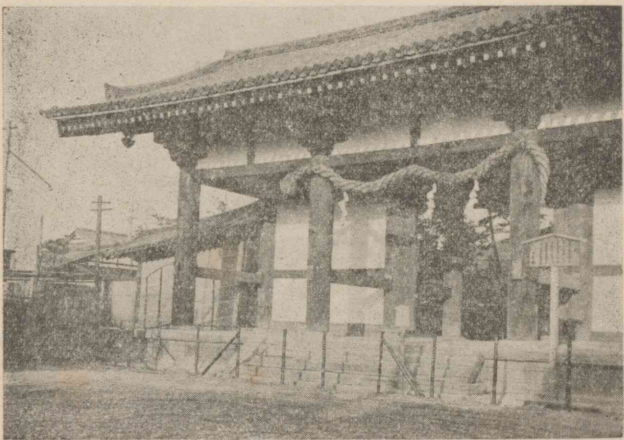
轉害門
聖武天皇の天平
年間(七三〇年代)
の建築。



大 佛 殿

屋上の鴟尾が金光燦爛として松の間が高く聳えて、松の梢には蟬がじい〜と鳴き始めてゐた。轉害門は奈良に残つてゐる建築の中で、最も古いものの一つであるが、その簡素にして雄大な結構は、すばらしいものだつたと思つた。私はその門をはいつて大佛殿の裏を歩いた。竹がわつさりと路に垂れてゐたり、柿の若葉が日を照りかへしてゐた

爪瓜



轉 害 門

りした。古い寺院の土塀が崩れた事によつて却つて繪畫的に見えるやうな淋しいひつそりとした道だつた。築地のすそにはきんぽうげが咲き、白い小さい蝶が休んでゐた。嫩草山と春日山との間にあつる谿の道は、若葉の緑が顔にうつるやうな、朗らかな感じの處だつた。爪先上りに苦しくなほほどの登りになつて、山の奥に踏み込んで行く。洞の楓といふ名のついてゐる通に

楓がトンネルのやうになつて居り、高い木には藤があちらにもこちらにも咲き垂れてゐた。奈良は藤の花の多い處だが、公園の茶亭ヨミのそれなどは大方すがれてしまつてゐるのに、こゝだけはまだふさふさとした紫を垂れて美しかった。奈良の若葉はいゝなど、私は今更のやうに思つた。

私は緑の深い中を縫ひながらあてもなく歩いた。

(観音巡禮)

島崎藤村

名は春樹。詩人。
小説家。長野縣
の人。明治五年
生。

九 菖蒲の節句

島崎 藤村

花祭

四月八日、寺院
で花御堂を設け
灌佛の祭を行
ふ。

クリスマス

キリストの降誕
祭。毎年十二月
二十五日に行は
れる。

幼幻

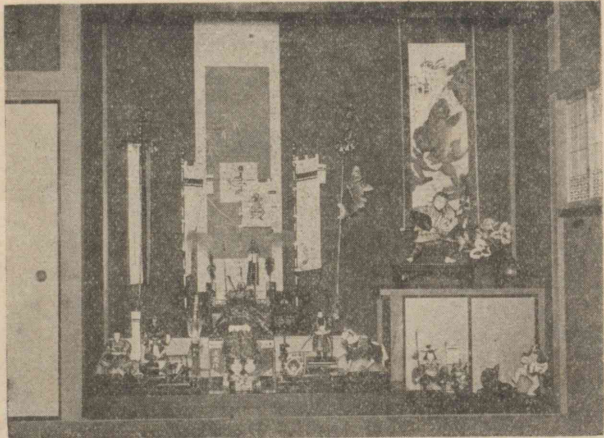
誇跨

國民の記念日でもなく、氏神の祭禮でもなく、卯月八日
の花祭とか、暮のクリスマスとかのやうな宗教的意味の
ある祭日ではないまでも、一年に二度の節句の祝がたゞ
たゞ幼い者のためにあるのは嬉しい。女の兒のため
は三月の桃の節句、男の兒のためには五月の菖蒲の節句
があるのは嬉しい。

五月人形の多くが、武勇を誇とした古い時代からの遺
物であるといふやうな理窟は抜きにしたい。そこに飾
られる一切のものは皆玩具だ。あの三月の節句に取出

されて、今にも合唱でも始めさうな雛や、古風な少年音楽
隊のやうな五人囃子の代りに、

端午の床飾



隊のやうな五人囃子の代りに、五月の節句を祝ふためにある
ものは、鍾馗と鬼と、金時と、桃太
郎などの行列だ。五月の空に
高く翻る鯉轍は、恰も子供の國
をそこに打建てたかのやうに
も見える。狭苦しい町の中に
あつても、あちこち屋根の上に
鯉轍を望むのは楽しい。鱗を

織織



鯉 轆

あの色彩、動きを悦ぶ子供の心を楽しませるやうなあの飛揚。大人の心をも子供の心に返すものは、あのはた〜と風^こに鳴る鯉轆の音だ。五月の節句を祝ふものは、室内にも屋外に懐しい。お伽話の情調を誘ふのもあつて、軒にふく菖蒲までがお伽話の情調を誘ふのもあつて、懐しい。

五月の節句を迎へる頃は、何と言つても季節の感じが深い。桃・櫻は過ぎ去り、椿や木蓮にも遅く、山吹や藤や満

満天星



天星^{うだん}などの花の香氣を放つ五月の初は、一年の中の最も楽しい季節の一つだ。遠い山々へはまだ雪の來る日があつて雨でも降れば裕では寒いこともあるが、私達の周圍はもはや若葉の世界だ。この好い時候に、楽しい菖蒲の節句がやつて來る。

桃の花が女の兒にふさはしいやうに、菖蒲はおのづから男の兒にふさはしい。一ふし鋭いところのある葉の形も好い。爽やかでみづ〜しい葉の色も好ましい。あれを軒にかけるといふことも、優しい風俗だと思ふ。一年に一度の菖蒲湯があつて、あの香氣が人を酔はせるばかりでなく、私達の身をも心をも温めてくれるのも嬉

おのづから

しい。青々とした菖蒲の浮いて居る中を掻き分けて湯槽に浸るのも楽しみだし、あの葉が私達の肌などへ、べつたりと附いた時の心持も悪くない。

粽ちまきの香は幼い日の香りである。粽ばかりは鄙びた處で作られるものほど好い。あの細長い粽の、葉の巻き附けてあるのを解いて、青い色に蒸むされた香りを嗅いだ子供の頃の心持は今だに忘れられない。粽の外に、柏餅、赤の御飯などと數へて來ると、五月の節句を祝ふもので、何がなしに懐しい思ひを誘はないものはない。私達の少年時代は、まだ軒の菖蒲にも残つて居るやうな氣もする。この節句を祝ふために、私の家の近所にも大きな幟竿

が立つた。矢の形をした風車を竿の先につけたもので、青葉に埋められた谷底のやうな私の家の前あたりからは、高く見上げるやうな位置にある。きのふの夕方、私はそこいらを歩き廻りに行つて、坂の下まで歸つて來ると、隣家の男の兒が、お婆さんの背中につかまりながら、じつと岡の上の風車の動くのを見つめて居るのに逢つた。私はまたその男の兒の顔を見まもりながら、暫くそこに立つて居た。漸く數へ歳の二つにしかならないやうな幼い子供にも、そんなに眼に映るものがあるといふことは、ある深い印象を私に與へた。

(藤村少年讀本)

一〇 木のぼり

前田 夕暮

前田夕暮
名は洋三。詩人。
神奈川縣の人。
明治十六年生。

織細

青桐の幹は青くてすべ／＼してゐる。まして二十年
生ぐらゐの若木の快い幹の肌ざはりは冷たくて、たつぷ
りと水をふくんでゐる。樹皮をすかして青い織細な神
經が感じられるほどである。

私の子供がその青桐の木に登らうとしてゐる。子供
は全身的に幹に抱きついて、背をまるくして三四尺ほど
やつとの事で登る。若木の青桐は空にひろげた若葉を、
梢の方でぴり／＼と軽くふるはしてゐる。

子供は顔を眞赤に染めて瞳を黒く光らせながら、また

五六尺のところまで登つて暫くじつところへてゐるが、
する／＼とすぐに滑り落ちてしまふ。

子供は滑り落ちてしまふと、暫くの間は胸を小鳥のや
うにふくらませながら、樹を高々と仰いでゐる。

子供は意を決するもののやうに、上着を地面に投げつ
けて、今度は勢ひ猛に登りはじめる。兩年でしつかり樹
を抱きしめて靴の踵を樹の肌につけて、遮二無二登つて
行く。が子供の體は二尺登つては一尺ずりさがり、三尺
登つては二尺ずりさがる。そして五六尺の高さまで行
つて力が盡きたのか、またする／＼と地上に滑り落ちる
のである。

もうあきらめてやめるだらうと思つて、私は少し離れたところから見てゐると、子供は靴をぬいで、一二間さきの方へぼんと投げ出して、跣足になつて、足の裏に砂をまぶしつける。そして樹に飛びつくやうに抱きついて、かみつくやうな體のうねりを見せてから、うん／＼とうめきながら、手も足も眞赤にして登りはじめ。私は見てゐて、少し苦しくなつて來たので餘程とめようと思つたが、それでもと、私までが全身に力をこめて思はず子供と吐く息吸ふ息を合せた。

子供は忽ち五六尺のところまで登つて、ちよつと考へてゐるやうであつたが、何の造作もなくまたする／＼と

とめよう。

ゐるやう。

滑り落ちて、さすがに疲れたと見えて、倒れるやうに地べたに寝そべつてしまつた。そして寝ながら青桐の梢を仰いでゐるのだ。

子供は寝てゐる間にすぐに疲勞を回復したと見えて、忽ち起きあがつて、今度は襦衣もズボンも脱ぎすてて、猿股一つになつて、側においてある支那製の水嚢みづがめへ片手を入れて、掌で水をすくつて口うつしに飲んだと思ふと、日光の方に向つてふうと霧をふいて腹を大きく膨らませたり低くしたりしてゐたが、また足の裏に砂をまぶしつけて、ちよつと上を仰いで見て、更に勢ひ猛に樹にとびつく。青桐は少しゆらくと揺れる。

襦衣

今度はみる／＼間に六七尺ほど登る。第一の下枝が頭のすぐ二三尺上のところにある。子供は满身汗にまみれ、全身朱に染つて、両手を長くのばせるだけのぼして、幹を抱いたかと思ふと、縮めてゐた足が同時にのびる。ともう両手を上にぐつとのぼしてゐる。そして下枝に片手をかけたかと思ふとひらりと身を跳らせて、その枝の上に立ちあがつた。そして私の方を見おろして「おうい。」と大きな聲をして呼ばつた。「おうい。」と私も思はず手をあげた。

青桐の葉といふ葉は、風にゆられながら日の光を受けて、きら／＼と喜ばしげに光る。

(緑草心理)

山本有三

名は勇三。戯曲家。栃木縣の人。明治二十年生。ニュートン 英國の大數學者並に理學者(西紀六四一—一七三七) 萬有引力 宇宙間に存在するすべての物體が互に引合ふ力。

二 ニュートンと蠅

山本 有三

皆さんの中で、ニュートンの名を知らない人は一人も
ないでせう。併し、萬有引力のやうなむづかしい法則を
発見した學者ですから、さぞむづかしい人だらうと思つ
てゐるでせうが、それは大違ひです。この大理學者は至
つて氣の優しい、ゆつたりした人でした。それは少年の
時分からさうだつたのです。こんな話が残つてゐます。
お晝の鐘が鳴つてもうクラスの生徒はみんなお辨當
をたべてしまつたのに、ニュートンだけ机にかじりつい
て一所懸命に數學の難問題を解いてゐました。彼は學

校の成績はよくなかったのですが、数学だけは非常に好きで、よく出来たさうです。そんなわけで彼は夢中になつて数学をやつてゐたところ、仲間の茶目たちはニュートンをからかふつもりで、彼の辨當をそつと取出して、残らず食べてしまひました。そして外側だけまた元の通りにしておきました。

そんなことを少しも知らないニュートンは、問題を解き終るとほつとした氣持になつて、急いで辨當を取出しました。そして包をひらいて食べようとすると、中はすつかりからつぽです。

その時ニュートンは何といつたと思ひます。彼はき

まり悪さうにひとり言をいひました。

「なあんだ、僕はもうさつき食べちやつたんだつけ……」

一つの事に熱中する彼は、人を疑るなんて小つぽけな了簡は微塵カクも持ちません。それだからこそ、宇宙の深い眞理も発見出来たのでせう。数学のことが出ましたから、ちよつとこゝに言ひたしておきますが、数学界に大革命を興へた微分積分といふ高等数学を発見したのもやはりこのニュートンです。

またこんな話があります。萬有引力の法則を研究中の時のことかと思ひますが、何億何兆といふやうな大きな数字をつかつて計算をしてゐた時に、一匹の蠅がひよ

いと飛びこんで来ました。そして彼のまはりをうるさく飛びまはつて、計算の邪魔をして仕方がありません。さすがのニュートンもこれには我慢しきれなくなつて、たうとうその蠅をばつと両手でつかまへました。併し、その蠅を殺すやうなことはしないで、そつと手の中へ入れたまゝ窓際へ行きました。さうしてぶん／＼いつてる小さい蟲にかう言ひました。

「邪魔をしないでおくれ。いま、計算してゐるんだから。さうらね、世界は僕達二人には廣すぎる位廣いぢやないか。」

さう言つて蠅を窓の外へ放してやりました。(心に太陽を持って)

三浦梅園

名は菅。儒者。豊後國(大分縣)の人。寛政元年(一四九)歿、年六十七。

且一旦

豈…ならむや。

〇 二三 學藝に志すもの

三浦梅園

今の人或は學に志し、或は藝に志すもの、一旦憤を起し、晝夜を分たず勉め勵むと雖も、己に一月を經、半月を過ぎ、怠る心早く生じ、わがつとめ至らざるとはいはで、性質の過に委す。馬は疾しとて朝暫く走りて止まんに、いかでか牛の終日ありかむには及ぶべき。谷間の石の磨かれ、井げたの圓くなるも、豈一朝一夕の力ならむや。今日止まず、明日止まず、今年止まず、明年止まず、而して後そのしるしあり。人一生の力をその道に用ふるさへ、なほその奥義に到るは易からず。況やわが一月、半月、乃至一年、半

年の勤めを以て、他人一生の功に比せむとす。思はざるの甚しきなり。

李白
字は太白。支那唐の大詩人。寶應元年（西紀七五五年）歿、年六十二。匡山、四川省に在る山。



李白

て書を読み、遂にその名を成せり。

昔李白書を匡山に讀む。漸く倦みて他行せし時、遂に老人の石にあてて斧を磨るに逢ふ。これを問へば、針と爲すべしとて磨る。といひけるに感じて、勉め

小野道風
日本三蹟の一人。醍醐・朱雀・村上の三天皇に仕へた。康保三年（西紀九六五年）歿、年七十一。

小野道風は本朝名譽の能書なり。若かりし時手を學



小野道風(筆里籙藤佐)

には遂に柳の枝に移りけり。道風これより藝の勉むるにあることを知り、學んでやまず、その名今に高くなりぬ。

(梅園叢書)

二三 文字の發達

我が國の太古には文字といふものはなかつた。たゞ口から耳、耳から口へと傳へてゐたに過ぎなかつた。朝廷に於ては語部かたりべといふものを置いて、國事に關する重要な事件は其の語部が代々に言ひ傳へて諸記したものであつた。然るに神功皇后の三韓征伐前後の頃であらう。支那から漢字が傳へられた。我が文化の遠く彼に及ばなかつた頃とて、當時の人は如何に驚いたことであらう。漢字をば優秀なる文化の象徴しやうていとして、美しくも尊くも感じたことであらう。言語は固より人類をして、他の動物

語部
古、大嘗會の時、
天皇の御前で古
來の史傳を語つ
た部氏。

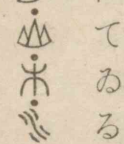
象徴

超越

思ひ半ばに過ぐ

蒼頡
支那上代黃帝の
史官。鳥跡を見
て文字を製作し
たと傳へられて
ゐる。

から超越せしむる所以の一つではあるが、話された言語は其のまゝでは後に残らない。之に反して、文字は時處を異にする人の間に自由に思想を通ずることが出来る。故に漢字の利用が如何に我が國の文化を促進したかは、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

漢字はいふまでもなく、支那で發明された文字である。古い傳説によると、黃帝の時代、蒼頡さいがつが始めて作つたと稱せられてゐる。最初は日・月・山・木・水の如く形の有るものは、の如き繪畫で表し、形の無いものは、「一」「二」の如く横線の上下に點を施して上下の意と表し、木の本末に横線を加へて本末の字を作り、更に木を二つ並べて

林とし、又木の中に日を入れて東としたやうなものもあれば、河や江の如く半分は意を主とし、半分は音を主とするものなど、だんくくと造字法が工夫された。更に進んでは、音樂の意である樂の字を「たのしむ」の義に轉じたり、善惡の惡の字を「にくむ」の義に轉じたり、又文字の本義に拘らず、其の音を借りて他の意義に用ひるもの、例へば女や若や爾の字を同じく汝の意に借用したり、比丘菩薩倫敦亞米利加の如く外國語の音譯にも應用する方法が案出されるに至つた。

漢字はかくいろくくの造字法によつて出來上つたものであるが、何れも形・音・義の三方面を有つてゐる。字形

複—復—腹

殖—植

儀—議

は最初多くは繪畫的な複雑なものであつたが、漸次單純化され、實用化されて今日使用してゐるやうなものに變化した。字音は漢字本來の読み方であつて、時代を逐うて増殖し、今日に於ては漢音・吳音・唐音・現代音の四種がある。行の字について言へば、行爲・旅行の如く「カウ」と讀むは漢音であり、行儀・修行の如く「ギヤウ」と讀むは吳音であり、行燈・行脚の如く「アン」と讀むは唐音である。現代音は、上海・哈爾濱・麻雀などの如く地名や特殊なものに限つて彼の地の音のまゝに使用せられるものである。漢字の読み方には、尙この外に字訓といふものがある。字訓は読み方が同時に其の意義をも示すもので、長年月の間に

多くの人々の工夫によつて國譯されたものである。大別して正訓義訓戲訓の三種とする。正訓は日月山川の如く漢字の正しい意味通りに譯したものであり、義訓は團扇只管七夕流石の如く漢字本來の意味ではなく、我が意味を當て嵌めて譯したものである。戲訓は義訓の一種と見られるもので、五月蠅をうるさい、十六をしし、山上復有山をいで(出)と讀む類がそれである。

現代日本人が使用してゐる文字は、大部分が漢字であつて、日本特有の假名文字も皆漢字の應用であり、國字と稱する所謂和製の漢字も、漢字の構成法に眞似て工夫されたものである。漢字渡來後、我が國人はこれが修得に

努力し、漸く其の使用に馴れて來るに隨つて、いろく工夫を重ね、奈良朝の頃には既に漢字の音を藉り、訓を借りて我が國語をさながらに寫し取る工夫を案出し、平安朝に至りては漢字をもととして、新しい文字が創められた。假名文字の創作が即ちそれである。こゝに始めて假名と漢字とを組み合せて綴る國文なるものが生れ、我が國人は其の思想や感情を自由に容易に發表することが出來、我が文化は急速に發達し、絢爛たる文學をも現出するに至り、漢字は假名と共に國字として缺くべからざるものになつたのである。

東郷大將
後の東郷元帥。
名は平八郎。鹿
兒島縣の人。昭
和九年五月歿。
年八十八。

ネルソン
イギリスの海
將(西紀一七五
一八五)。
トラファルガル
スペインの西南
隅、ジブラル
ル海峡外。
ナポレオン
フランスの勇
將(西紀一七六
一八三)。

伯仲の間

〇 一四 東郷大將

忠烈美譚

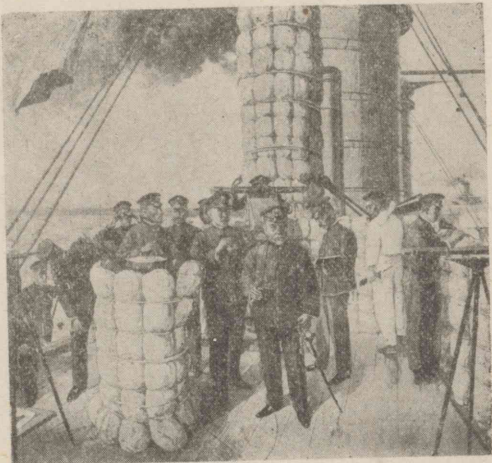
世界の海戦史上、最も赫々たる名聲を博するものは、英
國の水師提督ネルソンなり。彼はトラファルガルの一
戦に於て、佛國の艦隊を全滅せしめ、ナポレオンの猛威を
挫けり。今これを、日本海上僅に三十時間の戦闘を以て、
敵が過ぐる九箇月間慘澹たる苦心を重ねて、東航せる三
十八隻の大艦隊を全滅せしめたる、我が東郷大將の偉功
に比す。其の世界歴史に光彩を寄與するもの、正に伯仲
の間^{イ差が無}にありと云ふべし。宜^べなるかな、世人東郷大將を呼
んで東洋のネルソンと稱する事や。

余

作者赤堀又次郎
をさす。

逸事

震天動地



三笠艦の上の東郷大將

加藤參謀長
名は友三郎。當
時少將。
秋山參謀
名は眞之。當時
中佐。
千金の身

るを知らざるもの如し。

時に加藤參謀長、秋山參謀、大將の危険を憂へて、千金の

卿郷

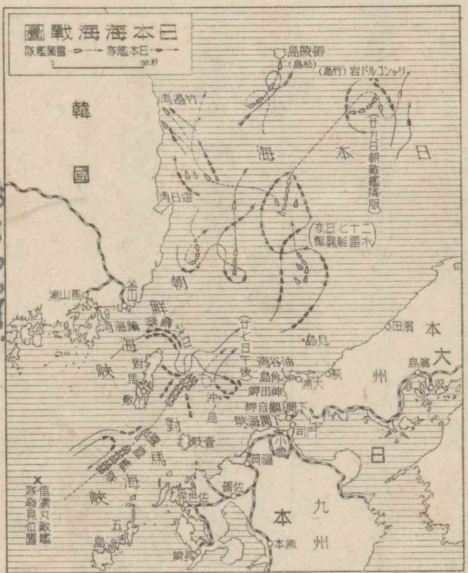
自重

消長

御身なり、かゝる危険を冒し給ふべきにあらず、冀はくば司令塔中に入りたまへ」といふに、大將は疎髯を捻しつる莞爾として、好意は謝す。然れども予すでに年老ゆ。今や餘命を君國に捧ぐべき時機到來せり。卿等年なほ壯、我が海軍の將來は卿等に待つところ多かるべし。卿等幸に自重せよ」と。二氏は此の情厚き言葉にいたく感激せしが、なほ重ねて、閣下の御一身はわが海軍の消長に關するや頗る大なり。ゆめ御身を輕んぜさせ給ふべきにあらず。とく司令塔に入らせ給へ。これ君國の爲なり。願はくば疾く」と、切に其の安きに就かん事を乞ひしが、大將は却つて之を怡ばずして、一步も此の艦橋を

退かじの決心を示されぬ。

かくて大海戦はいよく開始せられぬ。砲聲殷々、硝



に、大將は從容として立てり。そのるに膽、甕の如き相模太郎の風姿を想ひ浮べしむ。とかくする中に敵彈飛び

從容
膽甕の如し
頼山陽蒙古來の
詩の一節。
相模太郎
北條時宗。

伊地知艦長
伊地知彦次郎
當時の三笠艦
長、大佐。

倉皇

來り、大將の立てる艦橋の下に爆發して、破片其の身邊を掠めぬ。而も大將は不動、山の如く、いさゝかも驚ける氣色なく、從容として望遠鏡を手にせるまゝ、仔細に戰狀を

皇國興廢在此一戰、各員一層奮勵努力

東郷大將筆蹟

觀望せり。伊地知艦長は、敵彈、大將の脚下に碎けしを見て、大いに驚き倉皇

其の傍に走りゆきしに、大將は平然として、其のあわたしきは何事ぞと言はまほしげに、莞爾として面を向けぬ。此の光景を目撃したる味方の士氣は愈、振ひぬ。皆口々に、大將は神にして人にあらず。露艦の撃ち出す彈丸、大

未曾有

將の脚下に平伏せるぞ可笑しき。」と大笑しつゝ、砲撃をつゞけぬ。幾何もなくして敵艦大破し、多くは戰鬥力を失ひて全滅に歸したり。斯くの如くにして未曾有の大勝は我が軍の手に收められぬ。沈勇東郷大將の如きは、蓋し稀に見るの偉人と云ふべし。嗚呼日本海海戰の偉業や此の人にして初めて成し得たるもの、皇國の興廢此の一舉に在るの秋、天此の偉人を降下して、我が國土を幸せるにあらざるなきか。

(忠烈美譚)

小笠原長生
海軍中將。宮中顧問官。子爵。佐賀縣の人。慶應三年(五七)生。いくそたび云々。八田知紀の歌。

大切 二五 皇天の加護

小笠原長生

いくそたびかき濁しても澄みかへる

水や御國のすがたなるらむ

古來、我が國が幾度か國難に直面しながら、少しも國威を損ずることなく、悠々三千年の金甌無缺の國體を保ち來つたのは、上は天皇の御稜威、下は我が忠良なる臣民の力によること勿論ながら、實に此の天佑神助の賜でなくして何であらう。即ち、皇祖皇宗の神靈を始め奉り、八百萬の神々が、常に我が國を加護あらせられてゐるからではないか。

金甌無缺

御稜威

天佑

文永の役

龜山天皇の文永十一年(五〇)蒙古來寇す。

弘安の役

後宇多天皇の弘安四年(四四)蒙古再び來寇す。

寛政

光格天皇の御代(四九一四六〇)。

桃源の夢

林子平

名は友直。志士。海國兵談を著す。寛政五年(四五)歿。年五十六。

彼の文永・弘安の兩役は固より、近くは日清・日露の二大戦役に至るまで、何れも我が國運を賭した國難であつたにも拘らず、よく皇土の全きを致し、其の都度一層の盛運を齎すに至つたのは、決してたゞ事ではあるまい。併しながら、こゝに皇天の加護といひ、天佑神助といふも、其の解釋に至つては、私は一部の世論と些か趣を異にするものである。

寛政の頃、桃源の夢遂に破れて、北邊漸く急を告げ來つた時、仙臺藩士林子平は率先して當局に向ひ、海軍充實の急務を叫んだ。併し、時の幕府を始め世人の多くは、「外夷何ぞ恐るゝに足らんや。我が神州には伊勢の神

擁護

惘然

擲揄

世に出まねい事、木に縁つて魚を求む(孟 子)

風の擁護がある。夷船海を埋めて襲ひ來るとも、神風直ちに起つてこれを打沈めてしまふであらう。」と稱して、更に子平の説を顧みようとしなかつた。これに對して、子平は惘然として、
「たゞ坐して神風を待たんとするか。」と、擲揄したことは有名な話である。

誠に子平の言葉の如く、努むべきを努めず、爲すべきを爲さずして、たゞ徒らに天佑を待ち、皇天の加護を祈るところは、實に謬れるも甚しいといはねばならぬ。若し、かくの如くして天佑を得んとするならば、所謂木に縁つて魚を求むるよりも更に甚しい愚といふべきである。

東郷元帥は常に、正義に神も人間の眞心に受取れる

「天は必ず正義に與し、神は必ず至誠に感ず。」と。實に至言である。天佑を得る道は、常に正義と至誠との二つでなければならぬ。此の二つを以て一貫すれば、いかなる困難に遭遇しても、そこに必ず天佑のあることは毫も疑ひないのである。

元帥は更にいふ、

「天佑は必ずある。若しこれが無いとすれば、それは未だ此方の至誠が足りないからである。」と。これを換言すれば、至誠あるところ必ず神助あり。正義あるところ必ず天佑を伴ふといふのである。

遭遇
毫も

換言

我が國の世界に誇るべきことも多々あらうが、就中我が國三千年の歴史が、常に光輝ある正義と至誠とに満たされてゐるといふことが、其の主なるものの一つでなければならぬ。従つて、いかなる國難にも天佑が影の形に添ふやうに伴つて、我が國を磐石の安きに置いてゐるのである。

忝かたじけなくす

我が國は正義と至誠とによつて立つ國であると共に、又天佑を忝かたじけなくする國である。

これに關して、最も具體的な實例たる日本海大海戰の場合に就いていつて見たい。

當時我が將士は、世界の最強國たるロシアを敵として

只管ただ

ゐるだけに、既に戰前から、只管君國のため盡忠報國の至

誠を以て、訓練に訓練を重ね、一日として怠らなかつたの

である。しかも、愈大海戰の當日となるや、天氣晴朗なれ

ども浪高し。」と、東郷司令長官の報告にある通り、激浪の

ため彼我の艦みづぶねは頻りに動搖して、照準を定めるに非常

な困難を覺えたのであつたが、それがために敵の放つ砲

弾は大概中らなかつたに反して、我が砲弾はよく敵艦に

命中して、我が將士の熟練せる技能を十分に發揮するこ

とが出来たのである。

これは正に天佑である。即ち至誠の賜に外ならなかつたのである。

加之、我が國には東洋の平和を維持せん

艦みづぶね

大概

加之

とする正義があつた。此の正義が感應して皇天の加護があつたのである。

此の事實は、一面又「天は自ら助くる者を助く。」といふ西諺の眞なることをも教へるものである。

こゝに於て、吾人は我が國が天佑の國であることよりも、寧ろ正義の國、至誠の國であることを誇りたいと思ふ。我が國民が常に上御一人の大御心を體し、至誠と正義とを以て内外に處するところがあるならば、そこには必ず天佑が生れ、神助が降り、國家の盛運は愈々期して待つべきであらう。私はかく信じて疑はぬものである。

(日本の誇)

西諺

寧ろ

一六 海と山

一海

千家元磨

千家元磨
詩人。東京市の人。明治二十一年生。

海が見える、

充溢した歡喜で

張りつめたやうな

海面の美しさ。

何といふ靜な力のこもつた海、

永遠の緑を深くたゞへて

盛り上つてゐる海。

日に輝いて純白な帆が

花のやうに流れてゐる。

(炎天)

川路柳虹
名は誠。詩人。
畫家。東京市の
人。明治二十一
年生。

二山

川路柳虹

力づよい斧をもつて
たち割つたやうな岩石の山、
よく晴れた空がうしろで、
鏡のやうにそれをかぎつてゐる。
……あの山だ、
夏の猛威が人を苦しめる日に、
人が自然と競争して、
その膽力を示すのは。

そゝりたつ岩をよぢのぼつて、
隠れた森林にいこひ、
冷却した太古の雪水の
腹にしみ渡るのをすくひ、
天上の樂音のたゞよひと響く
あの冷たい風を吸ふのは。
山をおもへば
わが心踊る。

(温室の花)

荻原井泉水
四〇頁頭註參
照。

一七 富士登山

荻原井泉水

晝畫

お山は實に鮮やかに晴れてゐる。夕陽の色どりを失つて、只黒く隆々と盛り上つた偉大な土の塊かたまりが、却つて彫刻的な尊嚴を以て仰がれた。空は硝子の様に透明で、ちぎれ雲の影一つさへなかつた。晝の光が消え失せたにもかゝらず、空氣そのものが光を持つてゐる様に、薄青く暮れずにゐた。路はお山へ向けて眞直ぐについてゐた。馬は慣れた道を心得顔に、自分の好きな歩調で私たちを運んでゐた。こゝらの裾野は小松が多かつた。小松の中に秋草が様々に咲いてゐるらしいが、丈の低いの

明星

暗示
表象



富士山

は皆夕の色に埋もれてしまつて、丈の高い女郎花と、路に近く咲いてゐる月見草とだけが暮れ残つてゐた。ふと西の空を見ると、今しもにじみ出た明星がたつた一つ、ぱつちりと光つてゐた。それはこの限りない野の廣さを支配する神の灯かとも見えなかつた。又、この山の昔ながらの尊さを、私たちに暗示する表

玲瓏

象かとも思はれた。私はだん／＼と薄れる靄に包まれて行くあたりの景色を、馬上から眺めながら、そしてその目でじつと明星を見つめてゐると、何といふことなしに、涙ぐましいほどな美しくさびしい感激が、心にこみあげて来るのを覺えた。

「お、月が——」私は覺えず馬上でかう叫んだ。それは東の空に低く、研ぎすまされたまん圓い光が玲瓏と搖ぎ出た所であつた。月が出ると共に、景色の調子はすべて一變した。今まで一様に薄青かつた空や、裾野は、くつきりとして、光と影との二つに分れた。空は朗々として光澤を帯びた。そしてお山はいよ／＼黒く大きな姿を

腹復複

以て出現した。その半腹から上の方には、小さな寶石のやうな灯が點々として鏤められてゐた。それは石室の灯であつた。路の上にも白い光が流れて來た。そして、私たちの七頭の馬が長い黒い影を投げはじめた。

馬返しの茶屋に着いた時は、夜氣を感ずる程だつた。「これから山も高くなるし、夜もふけるから、」と強力がいふので、私たちはメリヤスの肌着を着込んだ。槽の明りの暗い手元で、饅頭を一杯づつ食べた。そして又自分自分の馬に乗つた。「今夜のお山はいゝぞ。」「こんな日和は今年になつて初めてだ。」馬子と茶屋の主人とが、かう話してゐた。

一合目から上は樹の茂りがある。月は大分高くなつたらしいが、枝がこんもりと茂つてゐたので、路は暗かつた。先に立つて行く馬子が一人、提灯をつけて馬をひいて行く。後ろの馬はたゞ先の馬に續いて、暗い中を進むのであつた。勾配イコウパイもだん／＼急になつた。それに岩や石が多いらしく、馬の蹄の音がかつ／＼と鋭く鳴つて來た。暗さの爲か、急な上りの爲か、馬は時々躓いた。さういふ時には、蹄鐵から火花が飛び散つた。併し樹の枝の薄くなつてゐる所では、月の光が雪のやうに葉の上にかがやいて、そこらを明るくした。又、ふつと茂みのとだえて居る所では、月の光が瀧のやうになだれ落ちて、路の上

とだえて

勾配

に溢れて居た。さういふ所を、馬は勇ましく歩を運んだ。三合目・四合目の室むろはもう戸を閉ぢてゐる。その前をひつそりと乗りながら過ぎた。五合目に着くと、馬は心得たやうにびつたりと止つた。樹帯はこゝらで全く盡きて、月はお山一面に照つてゐた。私たちは馬を下りた。馬はしつとりと汗ばんで、水を浴びたやうに濡れた肌を月にさらしながら、おとなしく足を揃へて居た。私たちはそここの室にはいつて、熱い茶を旨く味はつた。そして用意して來た夕食の辨當を開いた。室には宿泊してゐる人が、布團一枚をひつかけて、ごろ／＼と寢て居た。五合目は「天地の境」と稱せられて居る。如何にもこの

吉田口
山梨縣、富士山
の東北麓の登山
口。
襲うて

船津
富士山麓の河口
湖畔に在る。

金剛杖
登山者の携帯す
る白木の八角又
は四角の杖。

あたりまで登ると、地上を離れたといふ感じがする。吉田口から裾野を來る時、しつとりと薄い夕霧が襲うて來るやうに思つたが、それはもやくとした白い雲となつて、こゝから見ると低く裾野一面を蔽うて居る。その彼方に、吉田の町の灯がちらちらと光つてゐる。それよりも尙遠く尙幽に見えるのが、船津の灯であつた。馬と馬子とを歸してからの私たちは、強力を先に立てて、靜に、一歩々々を踏んで行つた。この夜ふけの山を踏んで居るものとしては、實に私たちだけであつた。鳥もゐず蟲もゐず、死のやうな靜寂の中に、七人の金剛杖の音のみが、かちり／＼と岩にあたつて鳴つた。その杖は、

五合目の室で「天地の境」といふ焼印を押してくれたものだつた。月はまことによく冴えて、何も遮るもののない山の肌は、晝のやうに明るかつた。時計を出して見ると十時に二十三分過ぎてゐる。その針がはつきりと月光に讀まれた。

自分の服にさはつて見ると、露でじつとりと濕つてゐた。莫蔭や笠は暑さをしのぐ爲に身につけて來たのだが、それが今では露をしのぐ爲のものとなつた。山肌の岩や砂にすがつて生えてゐるわづかの青いもの——**偃**松や濱梨の木や薊など——の葉にも露が光つてゐた。空を見ると、まばらな星が、大きな露の雫のやうに、きらき



松
濱梨
偃

精進の宿
精進湖畔の宿
屋。

らしてゐた。さうした星が、ふつと流れて下界の方へ落ちたりした。こゝから見ると、白い雲が海のやうに浪立つてゐる、下界の方へ。――

六合目の室はびつたり閉ぢて居たが、その前に差掛けのベンチが出来て居た。そこへ腰掛けて休んだ。私は精進の宿を立つ時、新しく替へて来た草鞋を踏み切つたので、強力の背から一足取つて穿きかへた。

頂に近くなるにつれて、路といふ路がなくなつてしまふ。纔に人が踏んだあとの砂が、それと判るのであるけれども、踏み堅められてゐるのではなく、足をかけると、さくりさくりと亡るので、歩は著しくはかどらなかつた。

六根清淨

「さんげく――六根清淨。――」登山の行者が唱へるこの言葉を、先へ行く者と後ろになつた者とが、お互に呼びかはして、心を引きしめ合つたりした。

なまじひに

七合目を越して八合目の室に入つて休んだ。時計を見るともう一時を過ぎてゐた。非常に睡いやうでもあつたが、こゝでなまじひに眠つてはいかぬと思つた。室の中の爐で木の枝を焚く煙が非常にけむくて、目から涙がぼろ／＼と落ちた。やはり目が疲れてゐる爲だと思つた。室の一隅に幕を引いて、別室のやうに仕切つて泊つてゐた外人の一群は、もう起きて、立つ用意をしてゐた。頂上で御來迎を觀ようとするならば、そろ／＼こゝを出

御來迎

なければならぬ頃だ。いつか爐の傍らに横になつて眠つてしまつた強力の青年を呼び起して、私たちは又登りはじめた。

山に酔つたといふよりも、睡眠を奪はれた爲であらう、頭がふらくする。さういふ者が私の外に一人二人あつた。自分の**莫蔭**を山の勾配の儘に砂の上に敷いて、ごろりと寝て見た。砂の上には草一本の影もない。月はちやうど額の上に懸つて、いよく天心に澄み切つてゐる。頭を高く仰向けになつた視線のうつろなはてに、北斗七星がきら／＼と光つてゐる。私はその一つをじつと見つめてゐた。と、その星がふらく／＼と動き始める。

天心
視線

螺旋

幻覺

久須志神社
吉田口から登り
つめた頂上薬師
岳に在る神社。

小さな螺旋を描きながら踊つてゐる。不思議だなと思つて他の一つの星を見つめた。するとその星も、亦螢の様にゆらく／＼と舞ひ始めた。これは**幻覺**だ。さう思ふと眼の疲勞の激しいことが解つた。また月を見た。月の光が眩し過ぎて涙がにじみ出た。九合目には久須志神社といふ社がある。そこへ入つて休んだ。神官の二人が、なかく／＼寒い。併し今朝は氷が張らないから――などともう朝の言葉を交はしてゐた。さうして私たちには、こゝは日の御子といつて、東へ真正面の所です。こちらで御來迎をお拜みなさい。といつたが、日の出までははまだ二時間近くも間があるので、私たちは頂上を

祝詞

幣幣

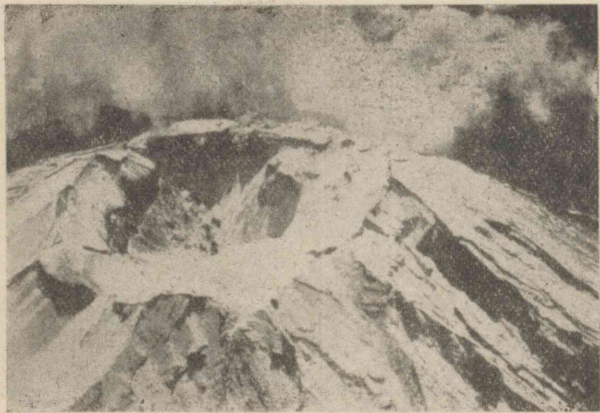
黎明 イヨカ

指す事にした。「頂上へ行く方は御祓おはらひをしていらつしや
い。」神官はかうもいつて祝詞のりとを讀んだ。それは、このよ
き日にお山へ詣でるよき人々の一族の平安を祈るとい
ふ意味を、神代の長々しい言葉を集めて綴つたものだつ
た。そして大きな御幣で、皆の並べた頭の上をばさりば
さりとはらつた。外へ出ると、これまで感じなかつた風
が冷えくくと動いてゐた。それが黎明イヨカの近い事を思は
せた。又、その風がふらくした頭を幾分かしつかりさ
せてくれた。

月の光は漸く衰へ始めた。その上、路が東へ廻つたた
め、西へ傾きかけた月が頂の峯の陰になつてしまつた。

混沌 ケヨカ

光と影との差別は薄らいで、裾野の夕に見た様な混沌と



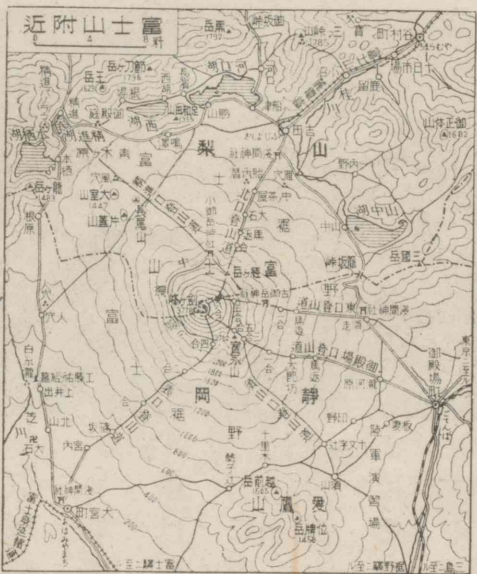
富士山頂

して青白い色が一樣に漂うて
来た、その混沌たるものの中か
ら、新しい光の生れるのを待つ
ばかりになつた下界は——殊
に甲州に寄つた方は——雲が
びつしり閉してゐた。その雲
のはづれに、今までは雲と同じ
やうに白く見えてゐたものが、
大きな勾玉の形をした湖水で
あるといふけぢめも、やつと明らかに認められた。それ

けぢめ

五湖
本栖・精進・西
河口・山中
鳥瞰的

が山中湖であつた。五湖の一として見残したこの湖を、
私たちはかうして鳥瞰的に眺め得たのであつた。



凍える

えるし、息も白く見えた。襦袢を借りてかぶる者もあつた。下の室を早く立つて来たに見える人々がぼつ／＼

頂上の室ではもう灯を消して居たが、屋根の下は薄暗かつた。そこへ私たちは上つて御來迎を待つことにした。じつとしてみると、寒さはひし／＼と身に迫つて来る。手は凍

と登つて来て、室はいつか一杯になつてしまつた。皆、草



御來迎

鞋のまゝで上るのだが、脚と脚とを入れちがへて餘地もないやうな所へ、牡丹餅の箱などが並べられた。名物といふ眞黒な甘酒だけはずまかつた。
カインカ
暁紅！朝の始まる前の先觸として、ほんのりとぼかし染にせられる地平線の赤さは、かうして高みから眺める時に、たゞに美しい許りでなく、地上の物の一切の希望を語つてゐるやうな

純潔 ジュンケツ

緊張 キンキョウ

神聖 シンセイ

刹那 セツナ

純潔なる尊さがにじみ出てゐる。「あゝ、ぢきに御來迎だ
——さういふ言葉が口々に傳へられて室の中にあつた者
も皆外に出た。大分明るくなつた岩の上には霜が置か
れてゐた。それを踏んで寒さうな緊張した顔が並んだ。
地平線の赤さは、うつすり⁺と吸ひ取られて、雲ではない
がある神聖なものの誕生をつゝんでゐる幕のやうな霞
が、つやく／＼しい光を帯びて來た。

——つと、一點の輝いた朱の色が、霞の幕を押分けたと
思ふ間に、その朱の一點が見る／＼擴がつて、麗しい太陽
の姿となつた。刹那、新しい光線は地上に又天上に漲つ
て來た。その第一の光線がまつしぐらに届いたのは、こ

三浦半島

東京灣の西をか
ぎる小半島、神
奈川縣に屬して
ゐる。

江の島

神奈川縣鎌倉郡
片瀬の海岸に近
い岩島。

大磯

神奈川縣中部。

小田原

神奈川縣足柄
郡、箱根山東麓。

熱海

靜岡縣田方郡。
温泉場。

外輪山

の頂上に立並んでゐる私たちの瞳であつた。

朗らかな朝は來た。大空は實によく晴れてゐた。大
地も實によく晴れてゐた。太陽を産んだ後の霞が消え
た所に、煙の靡くやうに灰に這つてゐるのは房總半島で
ある。海は空と差別がないが、雲のやうに置かれた大島
が、そこは太平洋の中だといふ事を示してゐた。その手
前に、更に鮮やかに一抹の線を引いてゐるのが三浦半島
である。海岸線に沿うて目を移すと、小さくしかも靜に
江の島が見える。馬入川が見える。その右手は大磯で
あらう。小田原熱海と思はれる邊も、箱根や足柄の山々
と、水銀を盛つたやうな蘆の湖が、外輪山の器の中に秘め

愛鷹山 富士山南麓の峻嶺。海拔約二〇〇〇米。
 天城山 伊豆半島の中央にわたる。最高峰は萬嶽。海拔約一四〇〇米。
 沼津 静岡縣駿東郡原
 静岡縣駿東郡 田子の浦
 静岡縣庵原郡 御前崎
 静岡縣庵原郡 伊豆半島
 景観

られてゐるのも、手にとるやうに見える。近くは愛鷹山の青い隆起を隔てて、天城山を重心とする伊豆半島がどつしりと延びてゐる。その右には洋々とした駿河灣が、描き残された素絹の白さを以て光つてゐた。沼津・原・田子の浦と、順々に南を眺めると、蛇の匍うたやうな富士川を越えて、三保の岬が小さく清水灣を抱いてゐる。その先に突出してゐるのは御前崎であらうか、そこからはもう霞んでゐる。私はこの大きなバナラマのやうな景觀に心を放つてゐた。

太陽はずん／＼と高く昇つて、強い光が靈山の頂から下界へ向けて擴がつて行つた。

(山水巡禮)

一八 夏 休

幸田 露伴

幸田露伴 名は成行。文學博士。文學者。東京市の人。慶應三年(三五七)生。

夏休にこそ

楽しき夏休は來れり。行李の紐は既に締めて、俵だに來らば、今にも家に歸り得るほどに用意整ひし人もあらん。楽しきは夏休にこそ。御身が父母は指折りて待ち給はん、御身が兄弟姉妹は日を數へて待ち居りなん、御身が今日の樂しみは、今年の樂しみの大いなるものの一つなるべし。

歸れ。飛ぶが如くに歸れ。野越え、山越え、はた海を越えて歸れ。歸りて父母の家に心緩やかにして夏を過せ。休むがための夏休なれば、心おちつけて大いに休み、さて

緩暖

秋の九月に入りて、勵み勤むるの精力を蓄ふるぞよき。
夏といふ語は「成立」の略にして、稻を始め種々の穀物、皆この時に方り成長繁茂し、根を張り幹を伸べて、やがての



緑蔭に書を読む

開花・結實の因をなすをもて、しか呼ぶとぞ。
この頃南風快く吹き、烈日盛んに照りて、天地の間生氣横溢す。
されば千草萬木皆各、勢づきて榮え誇るのみならず、鳥の聲は曉にいさみ、蟲の翅は夕にきほひ、魚も溯り躍れば、貝も繁殖す。人も春よ

横溢

きほふ

沛然

をかし

翠光

檐

よろづ

りこの季に互りては、面の色も冴え、身の力も張り、鍛錬を加ふれば、肉體は發達し易き傾きあり。

思へば夏の天地はまことに壯快なり。梢を渡る旦の風、空に峙つ雲の峯、さては天の鼓の轟き、循つて雷雨の沛然として至るなど、いづれかをかしからざらん。緑蔭に書を讀めば、翠光詩趣とともに胸に沁み、小樓に箏を弾き已めば、檐の風鈴も清き音を和す。いと暑くて苦しき日も、一庭の穢を掃つて打水に夕の涼しさを招き、浴後を團扇片手にそゞろ歩きたるなど、その樂しきは、冬はもとより、秋にもはた味はふべからざるものあらん。

よろづの家具どもを亂りがはしからず取片づけ、襖障

緑蔭

子開け放ち、さては庇まはり縁側など清らに掃ひ拭き、
 汚れぬ衣着て、煩しからぬ心持ちたらんには、夏はまことに
 好き時節なるべし。暑し苦しとのみ口癖にいひて、我
 が務めを怠り、或は晝寢に身を倦ませ、朝寢に心を荒ませ
 ては、夏ほど苦しき時はなかるべし。休み慰めんが爲の
 夏休なれども、意味なき怠に快からず永き日を暮さんは
 惜しむべし。夏季休暇の四十日、またこそ御身が生涯の
 一部ならずや。

(露伴全集)

意時

一九 涼 み 臺

吉村 冬彦

吉村冬彦
 本名は寺田寅彦、理學博士、
 高知縣の人。昭和十年歿、年五十八。

毎年夏になつて、そろ／＼夕方の風が戀しい頃になると、物置にしまつてある竹製の涼み臺が中庭へ持出される。これが持出される日は、私の單調な一年中の生活に、一つの著しいくぎりを付ける重要な日になつてゐる。もう明日あたりは涼み臺を出さうぢやないかといふ事が、誰かの口から言ひ出される。しかし其の翌日が雨であつたり、さうでなくても、色々の事に紛れたりして、つい一日二日と延びる。其の中にいよ／＼今日はと云ふ事になつて、朝の内に物置の屋根裏から臺が取下され、一年

中の塵埃や黴がぬれ雑巾で丁寧^{ていねい}に拭ひ清められ、それから裏庭の日影で乾かされる。そしていよ／＼夕方になつて中庭に持出されると、それで始めて私の家に本當に夏が來たといふ心持になるのである。

涼み臺の外に、折り疊み椅子が三つ、同時に並べられて、一同が中庭へ集る。まだ明るい宵の中には、繩飛をする者もあれば、寫生帖を出して、おぼあさんの後姿をかいてゐる者もある。明朝咲く朝顔の蒼^{あざ}を數へて報告する者もある。幼い女兒二人は、縁側へいろ／＼な花を並べて花屋さんごつこをする事もある。暗くなると、花火をしたり、お伽噺をしたり、おぼあさんにお國の話させたり

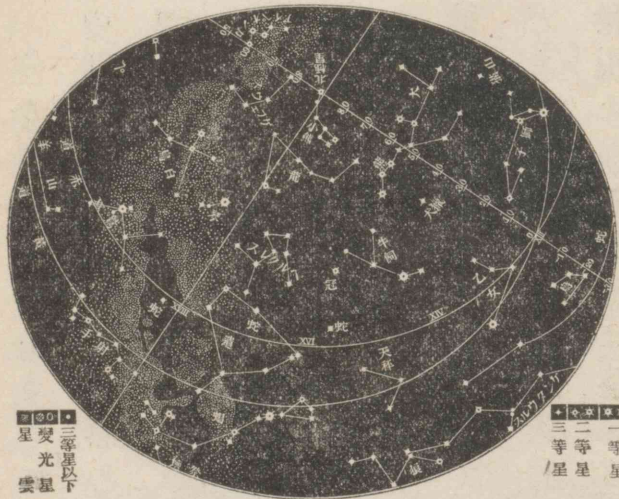
してゐる。幼い子等には、まだ見たことのない父母の國がお伽噺の中の國のやうに、不思議な幻像に満たされてゐるやうに思はれるらしい。例へば郷里の家の前の流れに家鴨が澤山遊んでゐて、夕方になると、上流の方の飼主が小船で連れに來るといふやうな、何でもない話でさへ、何かしら一種の夢のやうなものを、幼い頭の中に描かせると見える。それでいつもお國の話^{はなし}をねだつては、おしまひに「あたしもお國へ行きたいなあ。」と一人が云ふと、もう一人が同じ言葉を繰返すのである。子供等の亡祖父の若かつた頃の昔話も屢^{しばしば}出る。私自身が子供の時分に幾度も聞かされた話が、また同じ母の口から出る

會津戦争
 明治元年、會津の松平容保は徳川氏の恩義を懐ひ官軍に抗したが、官軍は皆これを平らげた。
 西南戦争
 明治十年鹿児島藩士、西郷隆盛を押立てて起した戦争。
 懐—壞

のを聞いてみると、それがもう遠い、昔の出来事であつて、數年前まで生きてゐた私の父に關する話とは思はれないやうな氣がする。まして祖父を見た事のない、或は臚げにしか覺えてゐない子供等には、會津戦争や西南戦争時代の昔話は、書物で見ると古い歴史の斷片のやうにしか響かないだらう。そしてそれだけに、却つて祖父に對する懐しきは、淨化され、純化されて、子供等の頭の中の神殿にをさめられるだらうと思はれる。

今年の夏始めに、涼み臺が持出されて間もなく、長男が宵の中に南方の空に輝く大きな赤味がかつた星を見つけて、あれは何かと聞いた。見るとそれは火星であつた。

動機



七月の星座圖

星座圖を出して来て、其の上に鉛筆で現在の位置をしるし、其の脇へ日附をかいて置いて、此の夏中の此の遊星の軌道を圖の上で追跡して見ようといふことにした。それが動機となつて、子供は空のよくはれた晩には、時々星座圖を出して、目立つた星宿を見較べてゐた。其の頃は、まだ織女や牽牛は宵の中になかなか東にあつた。西の方の獅子宮には、白く大きな

素人

盲龜云々
稱揚諸佛功德經
といふお經にあ
る句。逢ひがた
いことにたとへ
る。

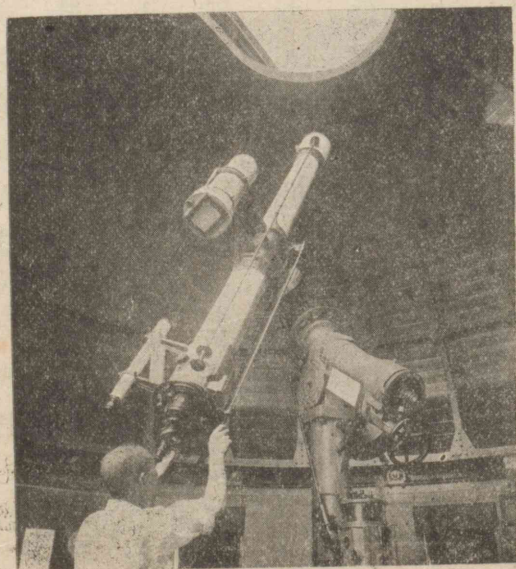
木星が屋根越しに氷のやうな光を投げてゐた。空を眺めてゐるうちに、時々流星が飛んだ。私は流星の話をすると同時に、熱心な流星観測者が、夜中空を見張つてゐる話をして、それから新星の發見に關する話もして聞かせた。おもだつた星座を諳記してゐれば、素人でも新星を發見し得る機會はあるといふ事も話した。一秒時間に十八萬六千哩を走る光が、一箇年かゝつて達する距離を單位にして、測られるやうな莫大な距離をへだてて散布された天體の二つが、偶然接近して、新星の發現となる機會は、譬へば盲龜が百年に一度大海から首を出して、孔のあいた浮木にぶつかる機會にも比べられ

宇宙

るほど少さうであるが、天體の數の莫大な爲に、新星の出現はそれほど珍しいものではない。唯光度の著しく強いのが割合に稀である。

こんな話よりも子供を喜ばせたのは、新星の光が數十百年の過去のものだといふ事であつた。

我が家の先祖の誰かが、何處かでどうかしてゐたと同じ時刻に、遠く宇宙の片隅に突發した事變の報知



(臺象氣央中)器測觀體天

が、やつと今の世に、此の世界に届くといふ事であつた。八月になつてから、雨天や曇天がしばらく續いて、涼み臺も片隅の戸袋に立てかけられたまゝに幾日も経つた。或朝新聞を見てゐると、某理學士が流星の觀測中、白鳥星座に新星を發見したと云ふ記事が出てゐた。其の日の夕方に涼み臺へ出て、子供と共に其の新星を搜したら、すぐ分つた。暫く見えなかつた間に季節が進んでゐる事は、織女、牽牛が宵の中に眞上に來てゐるのでも知られた。そして新星はかなり天頂に近く、白鳥座の一番大きな二等星と光を争ふほどに輝きまたゝいてゐるのであつた。

「暫く怠けたので、新星を發見しそこなつたね。」と云つたら、子供はどう思つたか、顔を眞赤にして面白さうに笑つてゐた。

其の中にまた曇天が續いて、朝晩はもう秋の心地がある。どうかすると夜風は涼し過ぎる。涼み臺もつい忘れられがちになつた。従つて星の事も、もう子供の頭からは消えてしまつてゐるらしい。新星の今後の變化を研究すべき天文學者の仕事はこれから始まるので、學者達は毎晩曇つた空を眺めて、時間を待ちあかしてゐる事であらう。

二〇 蜀山人の盆燈籠

饗庭 箕村

饗庭箕村
名は與三郎。小説家。東京市の人。大正十一年歿、年六十八。
文化元年
光格天皇の御宇(西暦)。

壽經寺
東京市小石川區表町の無量山傳通院。

草市
行燈燈籠

大田南畝
名は覃、號は蜀山人。狂歌師。文政六年(西暦)歿、年七十五。



村 箕 庭 饗

文化元年の頃とか、小石川に庄助と呼ぶ男住めり。日傭又は擔ぎ商ひなどして世を渡りしが、七月十二日の朝、小石川壽經寺の門前に立つ草市へ行燈燈籠といふものを持行き、て賣りけるところ、如何にしけるにや、買ふもの更になく、賣れしはわづか十ばかり、残りしは多ければ、力を落し、情なき顔して擔ぎ歸りしが、大田南畝翁方へは常々出入る者ゆゑ、歸りがけに立寄り、臺所の者に向ひ、

神樂坂
今の東京市牛込區に在る坂の名。
かこつ

「儲々困る事かな。この盆は如何にして過し申さん。今朝の市にこれほど燈籠賣れ残り候。この分にては明朝神樂坂の市に持行き候とも、また今朝の如くなるべし。もとより手細工にせし事にはあれど、聊か資本もかゝりたり。この分にては水も吞まれ申さず。」と話しかこちけり。

南畝翁は座敷にてこれを聞かれ、手に持つ盃を下に置き、
「かの聲は庄助にあらずや。何事を申すにや。」と問はるゝにぞ、傍らのもの、
「かやうくにて、またかのぐづ男が泣き申し候。」とい

顛の下が乾く

ひければ、翁は臺所へ出でられ、
「偕も氣の毒なる事よ。顛の下が乾きては誰も難儀な
らん。我がいふ如くせば、少しは賣るゝ事あるべし。」と
いはれければ、

「それは有難き事に候。いかに致すべきか。」と、翁の顔
を如何にも有難げに仰ぎ見て問ふに、翁は白紙五帖ばか
り取出し、

「これにてその燈籠を張替へよ。我それに何か書きて
やらん。」との事に、悦びて立歸りしが、忽ちに百ばかり張
替へて持來れば、翁は例の草書にて、狂歌やら發句やらな
ぐりつけて渡されしに、庄助は頭を搔き、一禮を述べて荷

狂歌
發句

ひ歸りながらも、蓮の花を紅入りにて書いてさへ賣れざ
るに、いかに先生なればとて、かゝる冗書むだがきの反古張オコにては
買ふ人はあるまじ。さりながら、あれほどに仰せられし
ものなれば、まづ明朝神樂坂の市へ持行き、賣れ残りたら
ば、その事を申して歎きつき、二百匹も借りて外商ひの種
とせん。」と、工たく面おもて顔がほにて、足も重く二三町歩む向うより來
りし侍、往きすぎしが、供の者にいひつけ、

「その燈籠は賣物か。」と問はしむ。

偕はと悦び、

「いかにも賣物に候。やうく傳つたを求めて先生に書い
てお貰ひ申したるにて、心あてもありて拵しらへ候なれども、

このやうには入り申さず候ゆゑ、お望みならば差上げ申さん。」といふに、

「價はいかほどぞ。」と問ふ。幾許といひてよき事やら、庄助はたと行詰りしが、思ひ切つて「五十文。」といふ。

「その値にて二つくれよ。」と、百文渡して買ひ行きたり。又後ろより通りが、りし人、それ賣るならば買ひたし。」

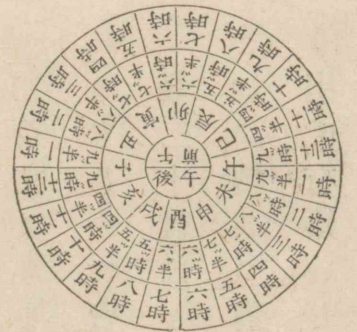
といふ。今度は息を一杯に吹いて、「六十四文。」といふ。いふがまゝにまた買ひ行きたり。後ろよりまた、此方へ

も二つ、我にも一つと、おのが家に歸るまでに二十ばかりも賣りて、凡そ一貫二百文骨折らずに取り、いきり立つて女房にかくと話せば、

いきり立つ

寢惚様
蜀山人自ら寢惚
先生と戯號し
た。

七つ
今の午前四時
頃。



「誠に寢惚様は生佛様なり。有難き事なり。明日は早くより持出で給へ。我も参りて手傳ひ申さん。お前一人にては手が足るまじ。一つ盗まれても五十と百の損なり。」と、女の智慧の慾が先なり。

夫婦にこゝ、七つ起きして神樂坂へ行き、並ぶる間もなく、蜀山人の書いたる燈籠は珍しい。」と、立止りて價を問ふ。

庄助思ひ切つて、「百文。」といへば、「さうもあらうぞ。」と百文にて買ひ行く。女房夫の袖を引き、「百でも値切らずに大勢買つて行かるゝからは、二百文といふとも賣れ申さん。二百文といひ給へ。」と、また智

五つ半
今の午前九時頃。

慧をつくるに、庄助額に手を加へ、「二百文はあまり高からう。百五十文。」といふ。それより百五十文にて六七十賣り、終には先見明らかなるその妻の言の如く、
「二百文よりまかりませぬ。」と肩を怒らし、まだ五つ半にもならぬに賣切りたり。

錢二十貫ほど、金にして三兩ばかりになりしゆゑ、夫婦こけつ轉びつ翁の宅へ來り、亭主をかきのけて女房まかり出で、有難いと數千遍述べて、「いかにも先生は生神様だ。」と、今度は神あしらひにして悦び歸りしとぞ。

翁が醉餘の戯れ、よく枯骨に膏すといふべし。

(養庭篁村「雀躍」)

芥川龍之介

小説家。東京市の人。昭和二年歿、年三十六。

二二 蜘蛛の絲

芥川 龍之介

或日のことでございます。お釋迦様は極樂の蓮池のふちを、獨りでぶら／＼お歩きになつていらつじやいました。池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうにまつ白で、そのまん中にある金色の蕊ずゐからは、何とも言へない好い匂が、絶間なくあたりへ溢れて居りました。

極樂は丁度朝でございました。

やがてお釋迦様はその池の縁にお佇みになつて、水の面を蔽つてゐる蓮の葉の間から、ふと下の様子を御覽になりました。

この極樂の蓮池の下は、丁度地獄の底に當つて居りますから、水晶のやうな水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、まるで覗き眼鏡を見るやうには、つきり見えるのでございます。

するとその地獄の底に、犍陀多かんたと云ふ男が一人、外の罪人と一しよに蠢いてゐる姿が、お眼に止りました。

この犍陀多といふ男は、人を殺したり、家に火をつけたり、いろ／＼悪事を働いた大泥坊でございませうが、それでもたつた一つ善い事をした覚えがございませう。と申しますのは、或時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が一匹、路ばたを這つて行くのが見えました。

そこで犍陀多は早速足を舉げて、踏み殺さうと致しましたが、「いや／＼、これも小さいながら命のあるものに違ひない。その命を無暗にとるといふことは、いくら何でも可哀さうだ。」と、かう急に思ひ返して、たうとうその蜘蛛を殺さずに助けてやりました。

お釋迦様は地獄の様子を御覽になりながら、犍陀多には蜘蛛を助けたことがあるのを、御思ひ出しになりました。さうして、それだけの善い事をした報には、出来るならこの男を地獄から救ひ出してやらうとお考へになりました。幸、側を御覽になりますと、翡翠ひすいのやうな色をした蓮の葉の上に、極樂の蜘蛛が一匹、美しい銀色の絲をか

けてをりました。

お釋迦様はその蜘蛛の絲をそつとお手にお取りになりました。さうして、それを、玉のやうな白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へまつすぐにお下しなさいました。こちらは地獄の血の池で、外の罪人と一しよに浮いたり沈んだりしてゐる犍陀多でございます。何しろどちらを見てもまつ暗で、たまにその暗闇からぼんやり浮き上つてゐるものがあると思ひますと、それは恐しい針の山の針が光るのでございますから、その心細さと言つたら、ございますせん。その上、あたりは墓の中のやうにしんと静まり返つてゐて、たまに聞えるものと言つては、たゞ、

罪人が吐く微な嘆息たの息ばかりでございます。これは、こゝへ落ちてくるほどの人間は、もうさま／＼な地獄の責苦に疲れはてて、泣聲を出す力さへなくなつてゐるからでございます。ですから、さすが大泥坊の犍陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかゝつた蛙のやうに、唯もがいてばかり居りました。

ところが或時の事でございます。何氣なく犍陀多が頭を舉げて、血の池の空を眺めますと、そのひつそりとした闇の中を、遠い／＼天の上から、銀色の蜘蛛の絲が、まるで人目にかゝるのを恐れるやうに、一すぢ細く光りながら、する／＼と、自分の上へ垂れて參るではございません

か。

健陀多はこれを見ると、思はず手を打つて喜びました。この絲に縋りついて、どこまでものぼつて行けば、きつと地獄からぬけ出せるのに相違ございません。いやうまく行くと、極樂へはいる事さへ出来ませう。さうすれば、針の山へ追ひ上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもある筈はございません。かう思ひましたから、健陀多は、早速その蜘蛛の絲を、両手でしつかりと掴みながら、一所懸命に上へくとたぐりのぼり始めました。もとより大泥坊のことでございますから、かういふ事には慣れ切つてゐるのでございます。

しかし、地獄と極樂との間は、何萬里となく隔つてゐるものですから、いくら焦つて見たところで、容易に上へは出られません。稍、しばらくのぼる中に、たうとう健陀多もくたびれて、もう一たぐりも上の方へは、のぼれなくなつてしまひました。そこで仕方がございませんから、先づ一休み休むつもりで、絲の中途にぶら下りながら、遙に目の下を見下しました。

すると、一所懸命にのぼつた甲斐があつて、さつきまで自分がある血の池は、今ではもう何時の間にか闇の底にかくれて居りました。それから、あのぼんやり光つてゐた恐しい針の山も足の下になつてしまひました。この

分でのぼつて行けば、地獄からぬけ出すのも存外わけがないかもしれない。毘陀多は兩手を蜘蛛の絲にからみながら、こゝへ來てから、何年にも出した事のない聲で、「しめた。しめた。」と笑ひました。

ところがふと氣がつかますと、蜘蛛の絲の下の方には、數限りもない罪人たちが自分ののぼつた後をつけて、まるで蟻の行列のやうに、やはり上へくくと一心によぢのぼつて來るではございませんか。

毘陀多はこれを見ると、驚いたのと恐しいのとで暫くは、唯、馬鹿のやうに大きな口を開いたまゝ、眼ばかり動かして居りました。

自分一人でさへきれさうなこの細い蜘蛛の絲が、どうしてあれだけの人數の重みに堪へる事が出來ませう。もし萬一、途中でできたといたしましたら、折角こゝまでのぼつて來た、この肝腎な自分までも、もとの地獄へ逆おとしに落ちてしまはなければなりません。そんなことがあつたら、大變でございます。が、さういふ中にも、罪人たちは何百となく、何千となく、まつくらな血の池の底から、うよくくと這ひ上つて、細く光つてゐる蜘蛛の絲を、一列になりながら、せつせとのぼつて參ります。今の中にどうかしなければ、絲はまん中から二つにきれて、落ちてしまふのに違ひありません。

そこで、犍陀多は大きな聲を出して、「こら、罪人ども。この蜘蛛の絲は己のものだぞ。お前たちは一體誰の許を受けて、のぼつて來た？ 下りろ。下りろ。」とわめきました。

その途端でございませぬ。

今まで何ともなかつた蜘蛛の絲が、急に犍陀多のぶら下つてゐるところから、ぶつりと音を立ててきました。ですから犍陀多もたまりませぬ。あつといふ間もなく、風を切つて**獨樂**のやうにくるくまはりながら、見る見るうちに闇の底へ、まつさかさまに落ちてしまひました。

後には唯極樂の蜘蛛の絲がきら／＼と細く光りながら、月も星もない空の中途に、短く垂れてゐるばかりでございませぬ。

お釋迦様は極樂の蓮池のふちに立つて、この一部始終をじつと見ていらつしやいました。が、やがて犍陀多が血の池の底へ石のやうに沈んでしまひますと、悲しさうなお顔をなさりながら、またぶら／＼お歩きになり始めました。

自分ばかり地獄からぬけ出さうとする、犍陀多の無慈悲な心が、さうしてその心相當な罰を受けて、もとの地獄へ落ちてしまつたのが、お釋迦様のお目から見ると、淺間

しく思しめされたのでございませう。
 しかし、極樂の蓮池の蓮は、少しもそんな事には頓着致
 しません。その玉のやうな白い花は、お釋迦様のお足みあしの
 まはりに、ゆらくと夢うてなを動かしてをります。そのたん
 びに、まん中にある黄色の蕊からは、何とも云へない好い
 匂が絶間なくあたりへ溢れ出ます。
 極樂ももうお午近くになりました。

(芥川龍之介集)

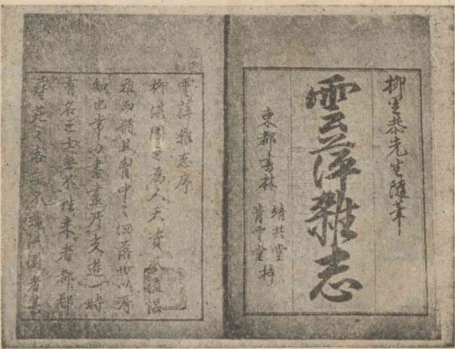
二三 寓言

一 堪忍

柳澤 洪園

柳澤洪園
 名は里恭。大和
 國(奈良縣)郡山
 藩の老臣。寶曆
 八年(西)歿。
 年五十三。

或人文盲なるものに意見して、世の交は他のことはい
 らず、たゞ堪忍の二字をよく守るべし。」といふ。文盲の
 人は頭を傾け、「かんにんとは四字にてはべらずや。」と指
 もて數へ、「御許には思したがひなるべし。かんにんと四
 字にてはべり。」といへば、意見せし人いふ、「愚昧の人かな。
 堪忍とはたへしのぶとよみて二字なり。」といへば、また
 頭を傾け、「たへしのぶならばまた一字ふえたり。五字と
 なり侍るべし。何と仰せありとも、我等は四字と思ひは



志 雜 萍 雲

べれば、四字にてかんにはいたしはべるなり。」といへるに、その人またいふ、汝が如き愚昧の文盲は實に諭し難し。人に似て蟲同様なり。おのれが氣まゝにすべし。」と大いに憤りければ、文盲の人笑ひて、「何とも仰せあるべし。我等はかんにんの四字を知りはべれば、悪口せられても少しも腹立ちはべらざるなり。」とて、笑ひゐしとぞ。其の智には及ぶべく、其の愚にはおよぶべからず。

(雲萍雜誌)

平 維 章

篠崎東海の異名。江戸の人。元文五年(西〇〇)歿、年五十四。

防 妨

二 猫 の 名

平 維 章

人は賢不肖ともに自己の見識はありたきものなり。昔さるなま好事のものあり。或時鼠を防がむ爲猫を飼ひぬ。毛色黄ばみ、形大にして猛々しく、さながら描きし虎に似たれば、とらと名づけて、寵愛せり。友人來りてその故を問ふ。答ふるにその意を以てす。その人いへるやう、「それはまた至らぬきたなり。虎より強きものあり。世に龍虎といへれば、龍こそまされるならぬ。」といふ。さらばその意に隨はむとて、龍と名づけぬ。さる人來りて、「それも至らぬなり。龍をのせて空を走るは雲なり。」

惑感

といへば、また「雲を吹き散らすは風なり。風こそよるしからむ」といひつる人のあるまゝに、風と名づけ置きたりしに、また人ありて、「何ほど烈しくとも、吹き破ることのかなはぬは壁ならむ」といへるほどに愈惑ひて、いかゞ名づけてよからむと、あたりの人に問ひければ、「壁も呼びにくからむ。壁に穴を穿つものは鼠なり。それを捕ふるものは猫ならむ」といはれ、初めて心づきしといふ。これ己に見識なき故、こゝに問ひ、かしこにたづねて、愈惑へるなり。餘り好事もいらぬものなり。

(とはすがたり)

二三 温故知新

故きを温ねて新しきを知る。

温故知新 (論語)

玉琢かざれば器を成さず。

玉不琢不成器 (禮記)

千里の行も足下より始まる。

千里行始於足下 (老子)

忠臣を求むるには、必ず孝子の門に於てす。

求^{ムルニハ}忠^ヲ臣^ヲ、必^ズ於^テ孝^子之^ノ門^ニ。
(後漢書)

樹靜ならんと欲すれども風止まず、子養はんと欲すれども親待たず。

樹^{スレドモ}欲^ス靜^シ而^{シテ}風^{スレドモ}不^ズ止^ス、子^{スレドモ}欲^ス養^フ而^{シテ}親^{スレドモ}不^ズ待^ト。
(韓詩外傳)

不義にして富み且つ貴きは、我に於て浮雲の如し。

不^ニ義^ニ而^{シテ}富^ミ且^ツ貴^キハ、我^ニ於^テ浮^ク雲^ノ如^シ。
(論語)

徳富蘆花

名は健次郎。小説家。熊本縣の人。昭和二年歿。年六十。

二四 秋 來 る

徳 富 蘆 花

夏去り秋來る

女郎花咲き、柿の實ほのかに黄ばみ、甘藷次第に甘し。つくくぼふしは晝に、松蟲、鈴蟲は夜に、共に秋を語る。粟稻蘆の穂のさわくと云ふ音を聞け。微雨はらく降りてやみぬ。これ今年の夏の季を送るの聲なり。

秋 分

今日は秋分なり。

朝起、外に出づれば、白露地に滿つ。稻穂・粟穂・薄花・蘆花、
すべて露の中にあり。蟲聲水の如く流る。

又

彼岸の中日なれば、近在の老幼男女、藤澤に鎌倉に、寺詣
して歸る者織るが如し。川邊には、は鯿を釣る者多く並べ
り。

午後の日悠々として、碧湖川に滿ち、行人路に滿ち、日光
空に滿ち、モ百舌鳥の聲耳に滿ち、風なく氣清うして、秋心に
滿つ。

藤澤
神奈川縣高座郡
の町。時宗の總
本山遊行寺が在
る。



又

日入りぬ。無花果の葉蔭薄闇くなりて、芙蓉の花も夕
と共に凋しまんとす。空に雁聲あり。
十五夜の雨に隠れし月は、今宵照り出でぬ。庭の眞砂
何時しか霜置ける様に白み、樹影黒く地に湧きぬ。
庭の白萩、月に照りて、雪の如し。

(自然と人生より)

大町文衛
三重高等農林學
校教授。

二五 秋の蟲

大町文衛

挽歌

みちのみの歌

静寂

凋落

秋を語る自然の物象は數多い。鳥や獸の動きにも、木の葉や草の花の變化にも、空の色にも雲の形にも、否空氣の觸感にすらも秋は沁みくゞと感じられる。この自然の中にあつて、小さな蟲達も後れをとらない。彼等も舉つて秋といふ自然の大きな挽歌に唱和する。卵を残して死滅するか、寒さと餓を凌ぐために冬眠に入るか、いづれ静寂に歸する冬を前にして秋の蟲は遽しい最後の活動を續けてゐるのである。

かくの如く秋の蟲は、自然の凋落を物語るのに相應し

いものが多いが、その中でも特に秋の蟲として目立つものは、秋になつて始めて成蟲として現れ、秋を唯一の活動の舞臺とするものである。

これらの蟲はわれくゞの先祖が數百千年の間秋ごとに觀、かつ聽いて、既に傳説化したものである。またわれわれも自ら掌の中に捕へたことのあるなつかしい思ひ出の蟲なのである。

しかしそれだからといつて、それらの蟲は決して陳腐になつてゐない。月並にもなつてゐない。秋ごとに彼等を觀、彼等を聽いて沁みくゞ秋を思ふのである。

秋の蟲として擧ぐべきものは數々あるが、先づ蟬の仲

陳腐
月並

きくくさ

つくくぼふし



焦燥

間では「つくくぼふし」であらう。この蟬は透明な翅をもつた小形のなか／＼美しい蟬であるが、蟬の仲間では一番最後に現れてくる。夏も終りに近づいて、秋風が吹きはじめ、櫻のわくら葉が一枚二枚散りかける頃に鳴き始める。オウシイ、ツク／＼、オウシイ、ツク／＼と鳴くその聲は秋が来たといふ感じよりも、もう夏が終るといふ號笛である。背中に火をつけられて追ひ立てられるやうな氣忙しい叫びである。その聲を聞くと、かうしてうかうかしてはゐられないといふ焦燥と味氣なきを感じる。自分はその聲を聞くごとに、中學生時代の夏休を思ひ出す。休暇が明日終るといふ日になつても、仕上つて

ゐない宿題を机上に置いて、思案してゐる窓の上でこの蟬に鳴かれたことを思ひ出す。

この蟬はその聲の調子に一番變化があつて、蝸を除いたら一番音楽的な蟬であらう。しかし秋も眞中になる頃には、もうゐなくなる。

秋出る蜻蛉の中では、なんといつても「赤とんぼ」を遁すことは出来ない。「赤とんぼ」と一般にいはれてゐる中には、いろ／＼の種類があるが「アキアカネ」などはその最も普通なものであらう。

赤とんぼは秋の最もよき景物の一つだ。澄み切つた紺碧の空と地に匂ふ黄菊・白菊の間に點綴する赤とんぼ

の可憐な形と色彩は、秋の姿をどんなに引立たせてゐるだらう。竹垣の竹の先にも、横木にも、その側に亂れ咲いてゐる小菊や、コスモスのどの花の上にも一匹づつ靜に羽を休めてゐる赤とんぼは、靜寂な秋の庭の小さな使者とも思はれる。一寸驚かせると一勢にぱつと飛び上るが、すぐまたもとの場所^{ところ}に止つてもとの靜けさに歸る。彼等は憩ひのみを思つてゐるのであらう。



赤とんぼのゐない秋はどんなに淋しいものだらうと思ふ。しかしさう感ぜしめるものは、その色彩と姿においてであつた。その可憐な^{しと}淑かさにおいてであつた。われ／＼は秋の蟲としてこの外に逸してはならない蟲をもつてゐる。その鳴聲を以て秋の天地を蕭條^{セウテイ}の氣に満たしむる蟲の一群がそれなのである。赤とんぼを秋の神の使者といふならば、秋の野山に満ちる彼等の鳴聲は秋の精といつてもよいであらう。秋の鳴く蟲は大別してコホロギ亞目に屬するものと、キリン／＼ス亞目に屬するものとの二つに分けることが出来る。内地に産するものだけでも、兩者とも三十種餘

エンマコホロギ



の種類があるが、そのおの／＼が獨特の音調と情緒をもつて鳴き誇つてゐる。その中どうしても名をあげないではゐられない蟲がある。それはまた私が最も愛好してゐる蟲でもある。第一に擧ぐべきはエンマコホロギである。その名のいかめしいにも拘らず、その聲は最も秋にふさはしく、八月の末頃から畑の畦や、河原の草むらからしきりに響いて来る。その聲は私の胸の中に秋の淋しさを誘ひ出さずには措かないのである。内地産のコホロギでは形が一番大きく、艶ツヤのある黒褐色のクリクリした蟲であるが、コロ／＼／＼と玉を轉がすやうに高く鳴いてからリイと低く下げる。その聲は明朗な中に

超脱

ツマレサセ



深い寂しさを籠め遙けき／＼感じがする。それはまた俗世を超脱した諦めアキラメの歌とも聞きとれる。エンマコホロギの聲を人間の世界を超脱した聲とすれば、それに反して最も現実的なほひのする聲はツマレサセの聲であらう。この蟲が家屋近くの石の下などからリイ／＼／＼と一高一低長く鳴き續ける秋の夜は、人なつかしさに思ひ亂れる夜である。昔の人も既にその聲を聞いて夜寒を知つたやうに、古くから一番親しまれてゐる傳説的なその聲は、しかし歌ではない、煩悶から解脱し得ないで何か求むる叫び聲であり、自らの薄命を訴へる物語とも聞える。

涼—涼

秋の鳴く蟲はこの二種に盡きてゐるのではない。コ
 ホロギの仲間では幽玄なカンタン、清涼なクサヒバリ、可
 憐なカネタ、キ、快活なマツムシ、優美なスバムシなどを
 はじめとし、キリ／＼の仲間でもウマオヒ、クツワムシ、
 ツコムシ、サ、キリなど数々の蟲が秋の自然を聲あるも
 のとする。彼等が歌つてゐるのは或は生の歡喜であら
 う。たゞわれ／＼はそれらを彼等と異つて解釋するの
 である。

柴田鳩翁
 名は亨。心學者。
 京都の人。天保
 十年（一八三九）歿。
 年五十七。

二六 心の洗濯

柴田鳩翁

八つさがり
 午後二時過。

江戸神田邊に、至つて貧乏な大根賣がありました。或
 日、例の通り一荷の大根を擔ひ、朝早うから賣り歩いたが、
 どうしたとやら、その日は一把の大根も賣れぬ。日ざ
 しを見れば、はや晝すぎ、腹の時計は八つさがり、財布の中
 にはまだ一文の錢もたまらぬ。これはつまらぬ。この
 大根が暮方までに七百文の錢に化けぬと、忽ち明日は釜
 の中に蜘蛛の巢がはる。どうしたらよからうと工夫し
 ながらいつの間、にやら兩國橋を渡り、本所の屋敷町を「大
 根大根」と賣り歩いた。
 或御屋敷の表長屋の窓の内から、「これ大根屋」と呼ぶ。

知行

呼んだのぢや

やれうれしや、まづ知行にありついたらと、呼ぶ所を見れば、表御門から右へ三つ目の窓の内から呼んだのぢや。そこで大根屋が表御門から荷を擔ひこんで、お長屋へ廻つて見ると、門から三軒目の高塀の内、門口には何某と標札が打つてある。

荷を持ちこんで見れば、縁先の障子をあげ、旦那殿がいま月代を剃られたと見えて、鏡立に向うて自分の髪を結ひながら、「その大根はいくらぢや。」といふ。「百に三把でござります。」といへば、「それは高い。二十四文づつにして置け。」といはれる。賣りたさは賣りたけれども、現在損のたつことなれば、「どうぞ三把にお買ひなされて下さ

れい。けさから江戸中を泣き歩いて、まだ一把も賣れませぬ。どうでも賣つて歸らねばならぬ大根、かけ値は一切申しませぬ。」といふ。かのお侍かぶりふり、「それでも高い。まからずば、まづよしにせう。邪魔ながら持つて歸れ。」と言ひ捨てて、縁先の障子をはたと締められた。大根屋もいろ／＼というて見ても、かのお侍が相手にならぬ。そこでしやうもやうもなく、「はて、つまらぬ。もう日の入には間もなし。なんでも四百の錢を持つて歸らぬと、親子五人があすの命が繋がれぬ。なんとしたものであらう。」と、手を組んで思案をしながら、縁先の金だらひにふつと目がついた。障子は締めてある。あたり

たらひ。

に見る人はなし。かの金だらひを水の入つたまゝで、大根二三把の下へそつと隠す。怖いものぢや、今まで廣かつた世界が、立ちどころに狭うなつて、五尺の身體をしぼらくも置くべき所がない。

そこで、荷を擔かちぎ出して門口を出ようとする、障子の内から、「これ大根屋。」と呼びかけられる。ぬからぬ顔で、「まかりません。」といふと、「いや、値はねぎるまい。その大根買はう。」といひさま、障子をさらりと明けられた。大根屋もびつくりしたが、どうぞして逃げて去なうと思ひ、「何把ほど入ります。はした賣はできません。」といふ。「いや、はしたでは買はぬ。その大根皆買はう。」

この縁先へ並べてくれい。」といはれる。さあ、大根屋も一所懸命、障子の締つてあるうちなら、金だらひの出しやうもあらうに、今更金だらひが出され、もせず。というて、賣るまいともいはれず。逃げて行かうにも、荷を捨てて歸つてはならず。千百萬の後悔も、今になつては間に合はず、うろくとしてゐると、かのお侍が、大根屋の顔をきつと見て、「われはきつううろたへてゐるぞよ。まづ金だらひから出して、大根の數を數へて見よ。」といはれる。大根屋は總身に冷汗を流して、もう斬られるか、ぶたれるかと、わななく震へながら、かの金だらひを恥かしさうにそつと出して、土に手をつき、「旦那様、眞平御免なされて下

されませ。何を隠しませう。先刻も申しまする通り、け
 さからまだ一文の商ひもいたしませず、このまゝ歸りま
 すると、明日親子五人が食べますることがなりませぬ。
 悲しい貧のぬすみ根性、面目次第もござりませぬ。七つ
 を頭に子供が三人、どうぞ親子五人が命を助けなされて
 下さりませ。」と、色青ざめて、土にあたまをすりつけて、わ
 びごとをする。

かのお侍、思ひの外、氣だてのよい人で、更に立腹の氣色
 も見えず、「いや、そのわび言には及ばぬ。まづ大根の
 敷をよんで見よ。」といはれる。こはくながら、大根を
 縁へ積み上げたところが二十三把。かのお侍、やがて七

こはく

遣遣

百六十四文の錢をとり出し、かの大根賣を呼んで、「さあ、そ
 ちがいふ通りに、二十三把、七百六十四文、序に金だらひを
 添へて遣す。貧のぬすみとはいひながら、われが根性は
 よほど汚れてあると見える。この金だらひは顔や手足
 を洗ふ道具なれども、たゞ顔・手足をあらふ計りではある
 まい。心の洗ひやうもあるものぢや。無禮は咎めぬ。
 この金だらひを遣す。持つて歸つて、とつくりと思案を
 し、心の垢を洗ひ落せ。」と言ひ捨て、障子を締めて内へ
 はいる。かの大根屋もこれから本心になつて夜晝働き、
 遂に三年目には、相應な八百屋になつたといふことであ
 る。

(鳩翁道話)

櫻井忠温
豫備陸軍少將。
松山市の人。明
治十二年生。

乃木將軍

名は希典。日露
戦争の時、第三
軍司令官とし
て、攻圍半蔵に
して旅順を陥れ
た。後従二位伯
爵に叙せられ
た。大正元年九
月十三日薨。
六十四。

白井中佐

名は二郎。時の
第三軍参謀。

乃木少尉

名は保典。乃木
將軍の第二子。
明治三十七年戦
歿。年二十四。

二七 將軍乃木

櫻井 忠 温

一 灯を消して

明治三十七年十月二十八日の夜、参謀部の電話のベルがけたましましく鳴つた。

「おうい、何か。」

と、受話器を耳にあてながらかういつたのが白井中佐である。

「俺か、俺は白井ぢや。ふむ又失敗。さうか。何！ 乃木少尉が戦死したて！ どうして、ふむく…… さあ、それを將軍に言はんといふわけには行くまいが、よしよ

し何とかするよ。うむく、もう一度夜襲する。よし、弔合戦をやつてくれ。さよなら。」

かういつて電話が切れた。
白井中佐は受話器を手から離しもしないで、呆然としてゐた。

眞黒な帷とびが彼を包んでしまつた。窓の外にはひゆうひゆうと寒い風が闇の中を吹いてゐた。

白井中佐は時計を見ると、もう九時に近かつた。中佐はどうしようかと考へた。しかし第一、戦況を報告もしなければならぬので、中佐は思ひ切つて大將の部屋へ入つて行つた。

部屋の中は眞暗であつた。大將はもう休まれたのかと思つて、一寸躊躇した。しかし、大將が火もつけないうで部屋にゐることはいつもの事なので、別にそれを怪しみもしなかつた。

すると、暗い中から「だれかい。」といふ聲がした。

「はい、白井であります。」

「さうか、何か用か。」

「戦況を申し上げに……。」

かういふと、ばちつとマッチが點つた。大將の顔が蒼白く光つた。

大將は蠟燭に火をつけた。蠟燭の心がじい〜と音

を立てた。

「戦況といふと……。」

「二百三高地でございます。」

「うむ、どうだつたな。」

「遺憾ながら、又失敗に終つたと、言つて來ました。」

「さうか……、死傷はどのくらゐあつたな。」

「は、まだ、はつきり分らぬと思ひますが、すぐ調べまして……。」

蠟燭の火に照された大將の蒼い顔を見ると、それ以上のことが、中佐の口から漏らしかねた。

大將はじつと灯を見つめたまゝ、何ともいはないでゐ

二百三高地
關東州旅順の背
面西方に在る
山、高さ二〇三
米。

た。

中佐は大將の顔を打成りながら、涙がこみ上げて來た。そして手足がぶる／＼と震へた。

「死傷者をよく調べて下さい。」

大將が思ひ出したやうにかういつた。

「はい。」

「もうそれだけかい……。」

「それに閣下、閣下の令息は、戦死されました。」

中佐の口から我ともなしに吐きだされた。

「何！ 保典が……さうか。」

かういふと、大將はふいと蠟燭の火を消してしまつた。

そして體がアンペラの上に倒れたやうな音がした。

中佐はじつとそこを見つめた。しかし、もう何の音もしなかつた。中佐は足を忍ばせて外へ出た。

ごう／＼といふ風の音が、窓の外を通りすぎた。

保典少尉は友安旅團長の副官であつた。三十日の午後八時頃、旅團長が残れる二中隊を提げて突撃するに決し、その命令を乃木副官に傳達させた。乃木副官は承つて、塹壕内を前進中、額に銃弾を受けて即死したのである。軍の高級副官吉岡中佐が、乃木少尉戦死の報を聞いたのは、白井中佐より少し後れてであつた。

吉岡中佐は津野田參謀に、「どうしたらいいだらう、將軍に話したものだらうか。」と當惑してゐたが、結局津野田參謀が話すことになり、乃木さんの部屋に入ると、乃木さんはまた蠟燭に火をつけられた。

津野田參謀が、恐るゝ乃木少尉戰死のことを報告すると、この時は、

「そのことなら知つとる。能く戰死してくれました。これで世間へ申し譯が立つ。」といはれた。そして又火を消して、ころり横に寢轉んでしまはれた。

津野田參謀は手持無沙汰に部屋を出て、吉岡中佐と二人して聲をあげて泣いた。

保典少尉は師團の傳令將校として、比較的安全の職に置かうといふことになつてゐた。師團でも勝典中尉戰死のこともあり、いくらか保典少尉に目をかけてゐたのであつたらう。

こんな話を少尉が耳にしたので、父大將へ手紙を書いた。

(前略)

- 一、先日私自分にて荷分け致せし外、母上様より御送相成候マント、此の者に御渡し有之度願ひ上げ候。
- 二、又自動拳銃を第一聯隊の故兄上様中隊へ送附の儀に付いて、私自身にて参り兼ね候に付き、何卒父上

故兄上様
勝典

様の御添書を頂戴仕り度く願ひ上げ候。

三、先日御話有之候私師團司令部へ参るとの話、歸營致し考へ候所、現今名譽多き野戦隊小隊長より、殆ど非戦闘員に等しき職に轉ずる事に候間、直接敵に接して、兄上様の仇を報いん事をも爲し得ず、且は何の特別の技能を有せざる私が、選拔を受くるの理由なきに、比較的安樂なる位置に赴くは、他同期生に對し心苦しく、他にその適任者(例へば外國語をよくする者)多きに對し、甚だ面白からず考へられ候故、或は此の御話の儀、御變更相成らざるや一寸御伺ひ申し上げ候。尤も御命令なれば致方も無之候へ共、せめて

旅順陥落まで如何にか相成らざるものにや、御伺ひ申し上げ候。先は要事迄。早々可祝

二十二日

保典

父 上座 下

保典少尉が兄の仇を打ちたいといふ念願、それを讀んで大將は非常に喜ばれた。そして師團司令部へは取らぬやうにしてくれと、師團長へいつてやられた。それで友安少將の副官になつたのであつたが、二百三高地で敢ない最期を遂ぐるに到つた。

兄の仇を取りたいから第一線へ出して貰ひたい、特別の技能のないものを師團へ取るといふのは、友人に對しても、情實があるやうで心苦しい、といふ保典少尉の態度は實に立派なものである。ことに父に對する親しみ、なつかしみの情が、紙外にあふれてゐるのを見て、そゞろに涙を催さしめる。

乃木大將が兩兒を失はれての後の心の淋しさはどんなであつたらう。この手紙を見ても、父子の睦じさがよくわかる。勝典が死んでも保典が死んでも、たゞ「さうか……。」と多くをいはれなかつたが、心臓は張裂けるの思ひで居られたらう。

「この父にして、この子あり。」といふことも、實に乃木大將父子の如きをいふのであらう。

II K.Nogi



弟兄典勝と典保木乃

乃木さんが長男勝典中尉の戦死の報を聞いたのは、第三軍司令部を編成して出征の途中廣島に滞在してゐる時であつた。その時も乃木さんはたゞ

「さうか。」と言つたきり、何も言はなかつた。

兩典氏が出征の途上同じ廣島に滞在した時、兄弟して寫した寫眞は、乃木さんは東京で受取つた。廣島へ來て

兩典
保勝典

勝典中尉が金州で戦死したことを聞くと、兩典氏が寫した寫眞屋へ、兼松副官をつれ、ふらりと出掛けて行つた。



軍將木乃

そして二人の寫眞の種板を手に持つて、寫眞を取られた。子供たちと一緒にゐる心持であつ

たらう。「うん、さうか。」と言つて何も言はなかつた乃木さんの胸の中、察するにあまりある。

明治四十二年旅順の表忠塔が出来た時、東郷大將と連れ立つて旅順へ行かれた。出發前三越吳服店へ鞆を注文したが、それにはK.Nogiと三越でネームをつけた。と

東郷大將
七二頁頭註參
照

ゑろが希典は「まれすけ」と讀むのだから、M.Nogiでなければならぬ。それが「きてん」のKとなつてゐたので、乃木さんは、一寸

「これは違つとるな。」

と言つたが、すぐに

「うん、よし、これでいゝ。」といつて、それを持つて旅順へ行かれた。

勝典中尉のK、それが乃木さんの頭に浮かんだのだつたらう。そして、K.Nogi勝典の鞆と思へばいゝと、却つてそれを持つて、思ひ出の旅順へ共々に旅することを嬉しく思はれたであらう。

(將軍乃木)

平田晉策
軍事評論家。兵
庫縣の人。昭和
十一年歿。年三
十八。

二八 日本の軍隊

平田 晉 策

世界に軍隊は多い。しかし、天皇陛下に率ゐられてゐる軍隊は、日本の軍隊だけである。

天皇陛下は、畏れ多いが、太陽のやうに公平無私であらせられる。天皇陛下の御命令はみな正義の御命令である。その強い、正しい、はつきりした御命令で動く日本の軍隊が世界で一番強く、一番正しいのに何の不思議があらうか。

日本の軍隊は神代の昔から、清く、正しい軍隊だつた。天孫瓊々杵尊が、豊葦原瑞穗國へお降りになる時にはじ

久米部

大久米命に率ゐられた兵士。神武天皇の御東征に従つて功をたてた。

大伴部

大伴道臣命に率ゐられた兵士。久米部と共に長髓彦を討つて功をたてた。

長髓彦

大和國(奈良縣)生駒郡登美の酋長。皇軍を孔舎衛坂(今の大阪府北河内郡日下村)に防いだ。

めて我が民族に皇軍といふものが生れた。

それから、神武天皇が日向の國から、東へくと賊を征伐なされた時、久米部の軍隊と、大伴部の軍隊が天皇の御命令によつて、ほんたうによく戦つた。そして大和國の長髓彦といふ賊軍の大將を平らげて、こゝに日本の國の礎はいよく固くなつた。

だから皇軍は、神代の昔、大和民族と共に生れ、神武天皇がこの國をお治めになつた時から、その御命令を奉じて國の護となつてゐたのだ。こんな歴史をもつた軍隊が世界のどこにあらうか。我等はこの立派な軍隊を持つ國に生れたことを喜ばなければならぬ。

山ゆかば
「海ゆかば水漬く
屍山ゆかば草むす
屍大君の邊にこそ
死なめ顧みはせじ。」
(大伴家持、萬葉集)

日本の軍隊は、初から天皇陛下の軍隊である。そして兵隊はみな御褒美の事などは毛頭氣にかけないで、「山ゆかば草むす屍、海ゆかば水漬く屍」といふ覺悟で戦つた。



軍旗

こゝに我等の陸海軍の美しい尊いところがあるのだ。軍旗を見れば、思はず心がひき緊る。戦場で若い少尉が、しつかりと旗竿を握りしめて、天皇陛下からいたゞいた神聖な軍旗を翻す時、みんなの心は電氣にかゝつたやうに感激するのである。そして敵のために傷ついた兵士も銃を杖にして立上つて

林聯隊長
陸軍少將林大八(當時歩兵大佐)。金澤歩兵第七聯隊長。昭和七年三月一日江灣鎮に於て戦死。
古賀聯隊長
騎兵大佐古賀傳太郎(當時騎兵中佐)。羅南騎兵第二十七聯隊長。昭和七年一月九日錦西に於て戦死。
嫩江
黑龍江省の北境に發源して松花江に入る。

ゆく。「聯隊旗の下で死なう。」これが日本の軍人の理想である。

上海の戦で戦死したあの林聯隊長も、最後の息の下から、聯隊旗を拜ませてくれ。」といつて死んだ。遼西で奮戦した古賀聯隊長も、最後まで聯隊旗をお守りしなければならぬと勇ましく戦つた。

蒙古の野原になびく聯隊旗、嫩江の水にうつる聯隊旗、雪の北滿洲を進む聯隊旗、日本の軍隊の戦ふところには、必ず美しくも神々しい聯隊旗が翻つてゐる。

また、太平洋の波に守りをかためる海軍の軍人も、艦尾に翻る軍艦旗を見るときに、しみじみと「自分たちは天皇

陛下の艦隊員だ、天皇陛下の海軍軍人だ。」と感するのである。どんな荒い波にも、どんな物凄い嵐にも、そしてど



軍艦旗

んなに強い敵にも、艦首に輝く菊の御紋章と艦尾に繖る軍艦旗のお守りがあれば、きつとく、勝つて見せるぞと誓ふのである。

あゝ、軍旗こそは、日本軍隊の生命である。日本の軍隊は、軍旗を天皇陛下の御姿とし拜して、この旗の下に、みんなが心を一つにして戦ふのだ。

(我が陸海軍に據る)

新制國語讀本卷一終

常用漢字

(大正十二年五月臨時國語調査會發表、昭和六年五月修正) (千八百五十八字)

【一】一丁七丈三上下不
世丙並【一】中【一】丸主
【二】之久乏乘【二】乙九
乞也乳亂【二】了事【三】
二五五井【三】亡交京亭
亦【八】人仁仇今介仕他
付代令以仰仲件任伊伏
伐休伯伴伺似位低住佐
何余佛作伸使來佳例侍
供依侮侯侵便係促俱俊
俗保俠信修排依俸併倉
個倍倒候借倫假偉偏停
健側偶傍傑備催働傳債
傷傾僅像僚僞僧價儀億

儉價優【九】元兄充兆宛
先光克兌免兒【八】入内
全兩【八】八公六共兵具
其典兼【四】册再【三】冗
【三】冬冷涼准凌凍【九】冗
凡【四】凶出【二】刀刃分
切刊刑列初判別利到制
刷券刺刻則削前剛副刺
割創劇劍劑【九】力功加
劣助努効勅勇勉動勤務
勝勞募勢勤動勸勸【三】
包【七】化北【二】區【七】
十千升午半卑卒卓協南
博【卜】占【四】印危却卵

卷即【九】厄厘厚原厥
【五】去參【三】及友反叔
取受【四】口古句叫召可
史右司各合吉同名后吏
吐向君吟否含呈吸吹告
咸周味呼命和咽哀品員
哲唐唯唱商問啓善喉喜
喪喫單嗣嘉器噴嚴囑
【四】因四回因困固國圍
園圓圖團【七】土在地坂
均坊坑坪垂型埋城域執
培基堀堂堅堤堪報場塔
塗塵境墓塀增墨墮壁壇
壓壞壞【七】士壯壹壽【六】

夏【夕】夕外多夜夢【六】
大天太夫央失奇奉奏契
奔奢輿奪獎奮【女】女奴
好如妃妊妥妙妨妹妻姉
始姑姓委姦姪姪姻姿威
娘娛娠媚婚婦婿媒嫁嫡
嫌孃【子】子字存孝季孤
孫學【宅】宅守安宏完宗
官定宜客宣室宮害宴家
容宿寄密富寒察寢寢實審
寫寬寶【寸】寸寺封射將
專尉尊尋對導【小】小少
尙【七】就【尺】尺尼尾尿
局居屆屈屋展層履屬

【山】山岡岩岳岸嶂峯島
 峽崇崎嶇【川】州州巡集
 【工】工左巧巨差【已】已
 【巾】市布帆希帝帥師席
 帳帶常帽幅幕幣【干】干
 平年幸幹【幻】幼幾【序】
 床序底店府度座庫庭庶
 康廉廓廢廣廳【延】延廷
 建廻【弄】弄弊【弋】弋式
 【弓】弓弔引弟弱張強彈
 【形】形影彰【役】役
 彼往征待律後徐徑徒得
 從御復微徵德徹【心】心
 必忌忍志忘忙忠快念怒
 思怠急性怨怪怯恐恥恨
 恩恭息悔悟悖患悲惟悼
 情感惜惠惡情惱想愁愉
 意思愛感慈態慕慘慢慎
 慣慨慮慰慶慾憂憐憚憲
 憶憾憤懇應懲懷戀戀
 【戔】戔戎戰戲戴【戶】戶
 戶戾房所扇【手】手才打
 扱扶批承技抑投抗折抱
 抵押披抽拂拍拒拓拔拘
 拙招拜括拈拳拾持指振捕
 捧描捨掃授掌排掛採探
 控推揚接提換握揮搗揮
 援損搖搜摘携摩撫揮擊
 操擔據擬擴攝【支】支
 【支】收改攻放政故敘教
 敏救敗敢散敬敵數數整
 【文】文【斗】斗料斜【斤】斤
 斤斤斬新斷斯【方】方施
 旋族旗【旄】旄旣【日】日
 且旨早旬旭昇昌明易昔
 星春昭昨是映時晚晝普
 景晴晶智暇暖暗暑暮暴
 曆曇曜【月】月有朋服朕
 替最會【木】木未末本
 朗望朝期【木】木未末本
 札朱机朽杉材村束柿杯
 東松板枕林枚果枝枯架
 柄某染柔查柅柱柳栗校
 株根格栽桃案桐桑梅條
 梨械棄棋棒棟森棺植楠
 業極榮構檣樂樓標樞模
 樣樹橋機橫檄檢櫻欄權
 【欠】欠欲款欺歌歌歌歌
 斤斤斬新斷斯【方】方施
 旋族旗【旄】旄旣【日】日
 且旨早旬旭昇昌明易昔
 星春昭昨是映時晚晝普
 景晴晶智暇暖暗暑暮暴
 曆曇曜【月】月有朋服朕
 替最會【木】木未末本
 朗望朝期【木】木未末本
 札朱机朽杉材村束柿杯
 東松板枕林枚果枝枯架
 柄某染柔查柅柱柳栗校
 株根格栽桃案桐桑梅條
 梨械棄棋棒棟森棺植楠
 業極榮構檣樂樓標樞模
 樣樹橋機橫檄檢櫻欄權
 【欠】欠欲款欺歌歌歌歌

熟熱燃燈燒營爆爐【爪】爪
 爪爭爲爵【父】父【爻】爾
 【片】片版牌【牙】牙【牛】牛
 牛牧物性特犧【犬】犬犯
 狀狂狩狹猛貓猶獄獨獲
 獵獸獻【玄】玄率【玉】玉
 王玩珍珠班現球理琴環
 鹽【瓦】瓦瓶【甘】甘
 甚【生】生產甥【用】用
 【田】田由甲申男町界畏
 烟齋畝略番畫異畱當壘
 【疋】疋疎疑【疒】疫疲疾
 病症痘痛痢療癖【火】登
 發【白】白百的皆皇【皮】皮
 皮【皿】皿盆益盛盜盟盡
 監盤【目】目盲直相省眉
 看真眠眼着睡督【矢】矢
 知短【石】石砂砲破研硬
 硯碁碎碑確磁磨礎【示】示
 示社祈祕祖祝神稟祭禁
 禍福禦禮【禾】禾秀私秋科
 秒租秩移稅程稚種稱稻
 稿穀積穗穩【穴】穴究空
 突窃窳窗窮【立】立章童
 端競【竹】竹竿笑笛符第
 筆等筋筒答策算管箱節
 範築篤簡簿籍【米】米粉
 粒粘粗粹精糖糞【糸】糸
 紀約紅紋納純紙級紛素
 紡索紫累細紳紹紺絳組
 結絕絡給統絲絹經綠維
 綱網綴綻綿緊緒線繙綠
 編綏緯練縛縣縫縮縱總
 績繁織繕繪繡線繼續
 【缶】缺【罔】罪置署罰罵
 罷羅【羊】羊美羣義【羽】羽
 羽翁翬習翼【老】老考者
 【而】耐【系】耕【耳】耳聖
 聞聯聲職聽【聿】聿擊
 【肉】肉肖肝股肥肩育肺
 胃背胎胞胸能脅脈脊
 脚脫腐腕腦腰腸腹膚膜
 膝臄臄膺臄【臣】臣臥臨
 【自】自臭【至】至致臺
 【自】與興舉舊【舌】舌舍
 【舟】舞【舟】舟航般舵舶
 船艦【艮】艮【色】色【艸】
 芝花芽芳苑苗若苦英茂
 茶草荒荷莊菊菌菓菜華
 萬落葉著莽蒙蒸蕃蔓薄
 藏藝藤藥【虜】虜虐處虛
 號【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲
 蠶蠻【血】血衆【行】行術
 街衝衡衛【衣】衣表袞袋
 袖被裁裂裏裕袖裝袷製
 複褒襲【西】西要覆【見】見
 見規視親覺覽觀【角】角
 解觸【言】言訂計討訓託
 記訟訪設許訴診詐詔評
 詞詠試詩詰話詳誇誌認
 誓誕誘語誠誤說課調談
 請論諭諸諾謀謁諮講謝
 謠謹謬證識譜警譯議護
 譽讀變讓【谷】谷【豆】豆

豐【豕】豚象豪豫【貝】貝
 貞負財貧貨販貫責貯貳
 貴買貸費買賀賈賄資賊
 賓賜賞賢賈賤賦質賴購
 贈贊【赤】赤【走】走赴起
 超越趣【足】足距跡路踊
 躍【身】身【車】車軌軍軒
 軟軸較載輕輦輪輯輸輿
 轉【辛】辛辨辭辯【辰】辰
 農【毛】込迎近返迫迭述
 迷追退送逃透逐途通
 速造連週進逸遂遇遊運
 過道達違遙遞遠遣適遭
 遲遷選遣避還邊遼【邑】
 邦邪邸郊郎郡部郵都鄉
 【酉】酌配酒酢酬醕酸醉
 醜醫【采】釋【里】里重野
 量【金】金釜針釣鈍鈴鉛
 鉢銀銃銅銘銳鋒鋼錯錄
 錢鍋鎖鎖鏡鑄鐘鐵鑑鑛
 【長】長【門】門閉開閉間
 閑閑關【阜】防附降限陞
 院陣除陪陳陰陵陶陷陸
 陽隆隊階隔際際障隣隨
 險隱【隹】隹雀雄雅集雇
 雌雙雜離難【雨】雨雪雲
 零雷電需震霜霧露靈
 【青】青靜【非】非【面】面
 【革】革靴【音】音響【頁】頁
 頂項順頓預頑領頭頻題
 額額顛類類顛顛【風】風
 【飛】飛飜【食】食飢飲飯
 飾養餓餘餅館餐【首】首
 【香】香【馬】馬馳駁駮駐
 騎騰驅驅驗驚驛【骨】骨
 髓體【高】高【髟】髮【門】門
 鬪【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮
 鯉鯛【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄
 【鹵】鹽【鹿】鹿麋【麥】麥
 【麻】麻【黃】黃【黑】黑默
 點黨【鼓】鼓【鼻】鼻【齊】齊
 齋【齒】齒齡【龍】龍【龜】龜

注意

(一) 本表にない漢字は假名で書くこと (二) 固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、た
 だし外國(支那を除く)の人名地名は假名書とすること (三) 代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞
 および助詞はなるべく假名で書くこと (四) 外來語は假名で書くこと。

ゆわう(疏黄)
 よわし(弱)
 かよわし(弱)
 いわし(弱)

かのえ(庚)みのえ(王)
 え(枝)
 しすえ(下枝)
 え(江)
 いらえ(入江)
 ふえ(笛)
 さざえ(螺螺)
 はえ(映)
 ゆふばえ(夕映)
 もえ(萌)

をのく(慄)
 をはる(終・卒・了)
 をり(檻)
 をり(節)
 をり(居)
 をる(折)
 をしき(折敷)
 しをり(葉)
 つづらをり(九十九折)

ず
 づ
 ず・づは語の上・中・下とも
 に紛れる。左の語の外は、
 づと書く。
 ずす(誦)

語の上ではゐ・いが紛れ、
語の中・下ではゐ・い・ひ

昭和十二年七月二十六日 印刷
 昭和十二年七月三十一日 發行
 昭和十三年一月十日 修正再版印刷
 昭和十三年一月十五日 修正再版發行

新制國語讀本

定價 卷一—卷九 各六十錢
 卷十 金五十八錢

新東條國文

編者 東條操

發行者 株式會社 三省堂
 代表者 龜井豐治

印刷者 株式會社 三省堂蒲田工場
 代表者 喜多見昇



製複許不

發行所

株式會社 三省堂
 (東京市神田區神保町一丁目一番地)
 株式會社 三省堂大阪支店
 (大阪市西區阿波座下通二丁目六番)
 株式會社 三省堂大阪支店
 (大阪市西區阿波座八三〇番)

云
中
一
A



山陽商業學校

志中一B 中村静人

A組

志島中學校 一年 中村静人

Nakamura